



ACS (INTERNATIONAL)

COVID-19



contents

01 Principal's
Message

02 Foreword

03 **First Prize**
Gao Zihan

08 **Runner-up**
Liu Jihan
Momoka Kanda
Shoma Hirano

25 **Commendation Award**
Kaylee Ng
Aiden Lim Jia Xing
Joeliane Woo Tronskar
Nira Pitiwiwat
Anh Chee Yoon
Cho Heewon
Lauren Chye Shu Lin
Ren Yicui
Trey Conrad Indradjaja
Yuki Kashiwagi
Chau Nguyen Khanh Gao
Jesslyne Yau
Nadya Amir
Nguyen Yen Minh Phuong
Siddid Mandi
Vo Thi Tra My



PRINCIPAL'S MESSAGE

The art of story telling in written form is a skill that is the result of both talent and practice. The student contributors to this year's Language Week Creative Writing Competition are to be hugely congratulated on their fine efforts and achievements to convey their message about Covid-19. The competition elicited creative writing in many different forms including posters, poetry, monologues, prose, diaries, as well as short stories and mini novels. Some contributors wrote in their own language whilst others demonstrated significant skills writing in a second language.

Covid-19 has affected us all in many different ways. Some have had their health adversely affected, others have been affected financially, socially, physically and emotionally. Our student contributors have captured the different impacts of the pandemic in their creative and original stories. These stories have been created during the Circuit Breaker period when schools were closed, many social restrictions were in place and Home Based Learning (HBL) was the order of the day. Despite these restrictions it is pleasing to note the extensive number of contributors to this year's competition and the high quality of the final products. It is indeed true that HBL has encouraged more independent, self-directed learning - a most important lifelong skill.

Heartiest congratulations to all contributors to this year's Language Week Creative Writing Competition and special acknowledgement to the winners and other finalists whose work have been published in this e-book.

Our encouragement to all contributors is to keep thinking and writing creatively – keep developing your talents, and keep telling your stories. And keep yourselves safe!

Best wishes
Rob Burrough

FOREWORD

The Covid-19 pandemic has been phenomena in the disruptions it has brought into our lives, yet the human race has shown great resilience in adapting to the forced changes and in finding new ways to deal with this new normal.

Even though the faculty was unsure about the responses for this year's Competition, we nonetheless went ahead. To our pleasant surprise, the enthusiasm and quality of works were heartening. It seems the pandemic and perhaps the Circuit Breaker has unleashed pent-up creativity.

ACS (International) offers as many as 9 languages in the form of 21 subjects in O Level, IGCSE and IB, in vastly different class sizes. To simplify matters, we decided on an open competition format allowing all entries to compete on the same ground. For instance, a piece of work from a student taking Chinese as a foreign language could compete with a student taking Vietnamese as first language. This year, we let students write in their own mother tongues too, even if those languages are not offered in school.

Such an open format requires extra effort from our panel of judges made up of subject teachers and Head of Faculty, here's a big thank you to them!

Hereby the Languages Faculty is proud to present our collection of winning entries from the Creative Writing Competition, with special thanks to the languages teachers who have worked with great dedication to make this book possible.

FIRST

PRIZE

倒数六十秒



高子涵

Gao Zihan

3-THO

我要消失了。

倒计时六十秒。

我在蝙蝠的身上沉睡。有个不知好歹的傻子把我咽了下去。烦死了，扰人清梦。我因此从沉睡中醒来，有几个自称白细胞的家伙拦着我，他们要和我争斗，我一抬手，他们齐刷刷的向后倒去，怎么说呢，弱的不堪一击。我跟着他的呼吸出去了。我在街上横行，没有人知道。

倒计时五十秒

我讨厌人类的欢声笑语和家人团聚，因为我没有家人。我不断分裂，无数个我穿梭在无数人的身体里。我破坏家庭，我大开杀戒。有时候我钻进一个家中作为中流砥柱的父亲的身体里，有时候我肆虐在一个单亲家庭的母亲身体里，有时候我在刚降生孩子的身体里横行霸道。我擅长破坏。他们说悲剧就是把美好的东西撕碎了给人看，我举双手赞同。

倒计时四十秒。

我终于被重视起来了。我被赋予了名字，挺傻的，新冠，全称不记得了，反正是人类取的。记载上说以前的人类都叫我们瘟疫。啊？为什么我有名字？我怎么知道，都说了是人类取的。

先是锁城，再是锁国，好像凭借着这微薄的努力就能阻挡住我一样。新的医院拔地而起，一批批的人进来，却只有少数人脱身。别做无用功了，有这点儿钱不如多买几块死后的栖身之地。

电视有好多说着不同语言的人。有的袖手旁观，有的幸灾乐祸，还有的趁火打劫。好奇怪，明明都是一样的人，但没关系，下一个就是你们。

我放火，我隔岸观火。

有人骂我，有人怨我。无所谓，反正人类杀的人类更多。

倒计时三十秒。

无数个我跟着四处逃窜的人离开了这个国家，又去另一个国家。为什么人们不能老老实实的待在自己该在的地方呢？人类专家明明劝诫过他们的。好话不听，自作聪明。

这对我来说无所谓，我在哪里都能兴风作浪。

但我逐渐感到了自己的力不从心，他们前仆后继的与我抗争，一批批走了，一批批接上。明明是微弱的光，聚在一起却明亮的晃眼。我以为人心是易变的，只要我稍稍作祟就能破坏他们的感情，但我太低估爱与大义这种说不清道不明的东西了，明明是深渊在侧，却还有无数人万死以赴，走过十万八千里也初心不改。

倒计时二十秒。

听说疫苗研发出来了。我也知道我时日不多了。

我不仅震惊于人类汇聚在一起的强大的生命力，且在这四面楚歌的绝境下，我居然还能感受到人间丝丝缕缕的爱意，我心里居然有油然而生的敬意。我看见他们举起那树枝扎的火把，将自己暴露于所有恶意的目光的中央，奔走呼号而风雨不歇。前面的倒下，后面的便来，添上一根一根的柴。他们的火把烧得繁盛，要照亮每一寸黑暗，要将夜空点燃，他们满怀着滚烫的热情与信仰，望着远方的光将希望在大地上播撒。当太阳最终降临的一刻，曙光中我眯起被刺痛的眼，却发现哪里是什么树枝木柴，那火把，分明是用他们拆下的肋骨，淋以热血点燃。病痛泥泞的躯壳下，藏着的竟是一颗颗精妙绝伦的，依然跳动的的心脏。

倒计时十秒。

我的身体即将化为灰烬，但我尚存一丝意识。

我合时宜的想起了以后的人类会怎么记载我，又非常不合时宜的怀念起了刚出世时路边热干面的味道，喷香。

倒计时结束。

有人上岸，有人隐没在海里。

我闭上眼。



Judges' Remark:

This is an excellent piece of fictional writing that has won full score. Zihan writes beautifully in a succinct yet poetic manner. She recounts in the first person her journey as the coronavirus from the beginning of spread to finally getting curbed. This recounting took place in all of 60 seconds.

Chinese is Zihan's first language.

RUNNER

UP

疫

刘吉瀚
Liu Jihan
3-LSG

“阿嚏！这鬼天气，冷死人了。”一个身着深黑色的羽绒服的中年男子，裹在身上厚厚的衣服使他看起来更加臃了。他一手提着一个黑塑料袋，另一只手上透明塑料袋里面装着一些蔬菜，摇摇晃晃的从嘈杂的市场里走出来。见公交车临近，便三步并两步挤上了公交车。他提着往公交车里走，没忍住又打了个喷嚏，他揉了揉鼻子，又用手抓住了扶手。

不一会，公交车门开了。一个穿着花花绿绿棉袄的小男孩被妈妈从公交车上拽下来了。“儿子，下午要好好听课”妈妈摸了摸孩子的头，把孩子送进了学校。妈妈转身向学校边上的大超市走去，她佩戴着工卡走到了收银柜边上，“阿嚏！欢迎光临。”

一对情侣从收银员手上接过他们购买的饮料，嘻笑着向超市三楼的电影院走去，“今天的电影票可真难买啊，都爆满了，首映就是这样难得的。”男孩子非常开心，“先生，您的票。”“阿嚏！这是我的票。”“好的，四号厅请往里走。”

“终于下班了，好饿啊！”检票员脱下自己的制服，出了电影院门径直向街对面的包子馆走去，“下班啦？还是老样子吧？今天的包子肉是我在菜场现买的农家自己的猪肉，要不要再加两个包子？”“好的，再加两个肉包吧，阿嚏！这个天气真冷啊！”“是啊，阿嚏！今天真的太冷了。等你们散场，我也准备早点打烊了。”深黑色的羽绒服的中年男子满脸堆笑的把面和包子端了上来。

66

一只蝙蝠从树上飞了下来，地下的猪食槽里有美味的吃的，可是没吃两口，蝙蝠就倒在了猪食槽的边上了，而边上的猪却不管不顾，还在大口大口的吃着，第二天，“就是它吧，看它没什么精神，别发了猪瘟了，可有两百斤呢，过年的钱可就不愁了。”没过一会，两声猪的嚎叫后就安静了，“今天这猪肉可是现杀的，自己家的呢，不多来点？”“好的，快过年了，我得多备点肉，省的你们到时又涨价，我们小包子铺可就活不了，哈哈！”深黑色的羽绒服的中年男子用手翻了翻案板上的肉，“来这几块，还有这个，肥点的做包子最好。”一会儿，中年男子接过老板递来的黑塑料袋.....

Judges' Remark:

The story is adapted from American movie *The Plague*. Jihan uses a third person perspective to tell the story of how coronavirus is spread from the bat's body to a pig and how it gets transferred to a chef, and then to everyone. The language used is vivid and lively.

Chinese is Jihan's first language.



66 COVID

Momoka Kanda 3-TCT

6月23日，我站在学校礼堂的台上对着电脑说话。

“你们好，我叫**Momoka**，今年十六岁。因为**COVID-19**，我们无法让所有人聚集在一起，所以我只能用**Zoom**来分享我**COVID-19**的经验。

在**COVID-19**期间，我们隔离了大约两个半月的时间。在这段时间，我们进行了居家学习。居家学习非常困难。我住在宿舍，所以我得独自处理各种问题。太多的不方便，隔离使我在很多方面发生了很大的变化。虽然我的头发长了，但是我不能剪头发，因为商店都关门了。

另外，我的体重增加了，有时情绪也不稳定。我几乎每天都感到有压力、烦躁和生气。一切都乱七八糟，尽管我每周有两个小时可以外出，但是我只能去杂货店购物。令我失望的是，我在这两个小时不能出去跑步或锻炼。后来，时间限制改成两个半小时，一个月后改成三个小时。对于我来说，三个小时还是不够，只能买菜和短时间外出用餐。

直到上周，时间限制终于取消了，尽管门禁是在晚上7:30，我还是很开心。本周的门禁时间在星期五和星期六改为9:30，我感到非常高兴。**COVID-19**病例正在减少，我真的希望它会很快结束，因为我在隔离期间的经历非常可怕，我再也不想经历了。

谢谢你们听我的演讲。”



“

”

Judges' Remark:

Momoka has used a creative angle to present a monologue of a student representative giving a speech to the school via Zoom. The setting in the work is very public yet the tone and content of the speech is highly personal. This interplay of public versus personal has cleverly revealed a raw emotion that is deeply seated in the tone. The language used is exceptionally good.

Chinese is Momoka's foreign language.

二人で一人の探偵

平野翔馬

Shoma Hirano

4-TKK

これは今から50年前、2020年に世界中で起こった事件である。

やあ、僕の名前は左翔太郎、みんなは翔太郎で覚えておいてくれ。僕は今75歳だが、今日は50年前に起こったカルナウイルス事件のことについて話そうと思う。

2020年3月、突如、中国という国で新型コロナウイルスが発見された。その時、僕は25歳で職業は探偵だった。自分で言うのもなんだが、僕はそこそこ名の通った探偵だった。なぜ僕が探偵になったのかと言うと、僕が15歳の時に出会ったおやっさん（翔太郎の師匠で翔太郎の憧れの存在）に探偵の素晴らしさとかっこよさを教わり憧れたからである。まあ、おやっさんは僕が24歳の時に謎の事件で死亡している。そして2020年に発見された新型コロナウイルスのニュースが流れた時は、最初正直なんの関心も湧かず、危機感もなかった。しかしこの後、様々な事件に巻き込まれることによって、事の重大さを知ることになる。

中国で発見された新型コロナウイルスは瞬く間に拡大し、一ヶ月もしないうちに世界中の感染者数は爆増し、それぞれの国の経済は悪化し世界は大混乱となった。2020年には我が国日本ではオリンピックが開催される予定だったが、それも延期となり日本の観光会社やレストラン、ホテルは大打撃を受けた。その時にはさすがに僕も危機感を持った。またこの大変な時に探偵としての仕事が入ってくるはずもなく経済的にも苦しかった。

66

その時に株式投資をやってみようと思いついた。なぜなら、もともと株式投資は興味あったし、その時の僕は正直株式投資なんて簡単に稼げるだろうと、たかをくくってたからかもしれない。そうして色々な会社のレートなどを見ていたが、どの会社も新型コロナウイルスの影響で株は下落し、この状況で株式投資は難しいなと思っていた矢先、唯一中国のカルナコーポレーションの株だけ高騰していたのだ。さらに、カルナコーポレーションの会社の総資産も前までの10倍以上に膨れ上がっていた。カルナコーポレーションはスマホの会社だが、もともとはそこまで売り上げは高くなく、アメリカのスマホ会社パイナップルよりも機能が劣っており、そこまで人気の会社ではなかった。なのに、なぜここまでこの会社は絶好調なのか、とても気になった。

この新型コロナウイルス問題が発生する1年前に、僕の師匠のおやっさんが中国のカルナコーポレーションについて調べてくるといい、その一ヶ月後不可解な事件で命を落としていた。僕は昔から勘だけはよくあたり、その時もおやっさんが命を落とした謎の事件にカルナコーポレーションが絡んでいると直感でわかった。そうと決まれば話は早い、後2週間後にはそれぞれの国で行き来できなくなるし、今のうちに新型コロナウイルスに最新の注意をはらって中国に乗り込もうと考えた。

しかし、僕はもともと頭が良くないし、ずっと前から欲しかった助手を探そうと思った。僕は今まで探偵としてそれなりに稼いできたし、おやっさんの遺産もある。何よりこの事件にはおやっさんの事件も絡んでいそうだ。そうしたら行動をなるべく早く起こしてこの事件を解決するしかない。この時久しぶりに僕の探偵魂が燃え上がった。まずは助手探した。事務所の近くの駅にポスターを貼り、そこに「探偵の助手を募集します、給料の値段は弾みます」と、書いた。そして、「面接試験があるので明日事務所に来てください」とも書いた。

正直、全然希望者は来ないと思っていたが、意外にも次の日8人も希望者が来た。まあ、これも俺が有名な探偵だからか、なんて思っていたが、最初の7人は正直かなり微妙で頭がいいとも思えないし、何よりやる気がなかった。そうしてがっかりしながら最後の希望者と面接した。彼は僕より5歳若く、名前はフィリップといった。彼は日本人と中国人のハーフらしい。中国人のハーフというだけでかなり興味が湧いたし、彼はアメリカのハーバード大学の卒業生でトップの成績だった。正直なぜ彼のような優秀すぎる人物がこの面接に来たのかは、さだかではない。さらに彼は驚くことに「給料はいらぬ」と言い出したのだ。この時、僕は生まれて初めて、給料以外の目当てで仕事をしたいという人をまじかで見た気がする。そして彼は唐突に、

「カルナコーポレーションのことについて調べて乗り込みたくて助手を探してるんですよ？」と、言い出した。この時僕は寒気がした。なぜ、この子がそのことについて知っているんだ、と思った。そしたら彼は、

「僕は、昔から相手の心が読めるんですよ。」と言い出した。どうやら相手の表情や行動、喋り方だけで相手が何を考えてるかの95パーセントがわかるらしい。この少年の素晴らしい才能と洞察力を気に入り、その場で採用を決めた。もともとおやっさんと二人で住んでいた事務所なので、すぐにフィリップの部屋を用意でき、その日から一緒に暮らすことになった。

一つ、彼を雇う上で気になったのは、今まで彼がどこに住んでいたのかと、彼の家族のことが全く不明だったことだ。だからその日寝る前に、彼に

「君の家族はどういった人たちなんだい？」と聞いた。そしたら、彼はいきなり暗い表情になり震え出した。そして彼は小さい声で、

「僕は18歳より前の記憶がないんだ。」と話した。

彼は

「ハーバード大学の寮ですずっと暮らして来て、記憶があるうちで家族と会ったことがないんだ。」といった。

そして僕はもう彼に家族について聞くのはやめようと思った。これ以上聞いても、彼を傷つけるだけだと僕の勘が僕にいった。そうして、次の日からカルナコーポレーションと今回の新型コロナウイルスについて調べ始めた。そうするとフィリップが、

「僕には星の本棚という検索機能があるんだ。」と言い出した。

僕は最初彼が何をいっているのか全く理解ができなかった。彼がいうには、彼の脳みそには世界中の知識と情報が入ったチップが埋め込まれている。そして彼の脳みその中にはたくさんの本棚があり、検索したいもののキーワードを何個かいうことによって検索することができる。彼の頭の中には地球上の全てでいいほどすべての知識を備えてはいるが、彼はすべてのことを読み終わった訳ではない。彼は星の本棚を使って検索するときは目をつぶり、精神統一することによって検索することができるらしい。

そうしてカルナコーポレーションについて調べていくうちに不可解な点が多く見つかった。まず、新型コロナウイルスを最初に発見したとされている医者はカルナコーポレーションの研究者であり、それを様々なメディアを使って公表した二日後に行方不明となり、謎の死を遂げている。これはどう考えてもその医者は組織のことを内部告発しようとしていたが、組織によって消されたという結論に至った。そのとき僕は、おやっさんもこの組織について調べ、戦ったことで組織によって消されたのかもしれないと思った。さらに経済状況的に考えても、組織の売上や技術が圧倒的に向上しており、組織のライバル企業が次々と倒産していつてくる。そうして組織の会長の園崎聡太という男や、その娘で組織の社長の園崎冴子も非常に怪しい。とりあえず中国に乗り込まないことには始まらないと思い、すぐにチケットを確保した。空港に着いて、

「中国行きだ。」といったら受付の人に

「正気ですか？」と言われた。

そりゃそうだ、このご時世、よりもよって中国に行くなんていう奴がどこにいるだろうか。そして僕はフィリップに

「一度中国に行ったらしばらく戻れないかもしれない。僕のような奴と相乗りする覚悟はあるか？」と聞いた。そしたら彼は笑いながら、

「もちろんさ！」と答えた。

なんだかすごく、この先危険の予感がしたが、もうここまで来た以上進むしかない、と思った。中国に行くにはかなり厳重な荷物検査と体温チェックをされた。そして空港の人に、

「一度中国に行ったら、しばらくは日本に帰れないかもよ？」と、低めに脅された。それでもこの不可解な事件のことが気になる、という興味が自分の心配を上回っていた。このときはまさかこれが新型ウイルスのことについて大きく関わっていたとは、このとき思いもしなかった。

飛行機で3時間ほどで中国の首都、北京についた。おやっさんの不可解な事件があったのは中国の武漢という場所で、それは偶然にも新型ウイルスが最初に確認された場所でもある。これには流石の僕も危機感を感じたが、フィリップは案外余裕そうにしている、ケロッとしていた。本当に肝が座った男だなあ、と思った。武漢にはカルナコーポレーションの研究施設とメインとなる工場があった。これはいかにも怪しく、ここに潜入捜査をすることに決めた。作戦としては、僕がカルナコーポレーションの研究者になりすまして潜入し、フィリップにはホテルで指示を出してもらうという役回りだ。研究所には案外あっさり入れた。驚くことに、研究所は武漢で最も大きい博物館ミュージアムとつながっていた。

ミュージアムの展示物のすごさに圧倒されていると、突如後ろから

「素晴らしいだろ、我がミュージアムの自慢の展示物は。」と言われた。彼は70歳ほどの老人だったが、高そうな服に身を包んだ男だった。僕は一瞬目を疑った。彼こそ、雑誌にもよく載っているカルナコーポレーションの会長、園崎聡太だった。彼は僕に

「見かけない研究者だね、新入りかな？」と聞いたので、とっさに

「はい！ よろしくお願ひします。」と答えた。

彼はニコニコしていたが、心は笑っていなかった。彼の中に何かドス黒いものを感じ、少し恐怖すら覚えた。そうすると彼はどこかへと立ち去りかけた時に、一人の女性が

「お父様調子はどうですか？」と彼に話しかけた。彼女は40歳ほどの女性だった。そして園崎聡太の一人娘のカルナコーポレーションの社長、園崎冴子だった。そうすると彼は、

「おお、冴子、順調に計画は進んでいるかな？」と問いかけた。彼女は

「もちろんです、お父様。」と答えた。そうすると、聡太はその場を立ち去った。冴子は僕に、

「何をぼーっとしてるの？ さっさと仕事に戻りなさい。この計画に遅れは許されないわ！」とやや怒り気味に僕に言った。そうしてまた研究室へと潜入した。なんとそこにはたくさんのサンプルのウイルスがあった。啞然としている僕に、研究所のリーダーっぽい人が、

「やあ君、新入りか？ 我が素晴らしきこの研究内容と目的を説明するよ。」と言った。とりあえずここまで誰にも疑われずに来れたのはラッキーだな、と胸をなでおろした。

そして彼から説明を受けた。彼の名は伊坂新九郎といい、年齢は40歳ほどで、言葉遣いはまるで紳士のようなだったが、不気味な表情をし、いかにも冷徹そうな顔立ちをしていた。彼から聞いた説明は驚きの内容だった。彼らは新型ウイルスを使い、世界中を混乱させ、人口をなるべく多く減らし、中国を世界のトップへと上り詰めるさせるための計画の内容だった。そして彼ら研究員に与えられた仕事は、もっと強く感染力の高いウイルスを開発し、それを世界で大流行させることであつたらしい。今世界中で流行っている新型ウイルスはあくまで試作品レベルの強さらしい。ただでさえ今のウイルスでも大流行し大量の死者が出ているのに、これ以上死者を出してはいけない、何としてもこの計画を止めなければならない、このことは今すぐにもでもフィリップに報告しなければ、と思った。そしてこの愚かな計画の証拠を入手し、世界中に暴露することでこの計画を止めようと決意した。そして伊坂が言うには、万が一研究員の誰かが新型ウイル

66

スに感染した時用に、新型ウイルスに直ぐに効く特効薬もあるらしい。その特効薬も必ず入手して世界のみんなを救ってやる。一人でも多くの命を助けるんだ、そう自分に言い聞かせた。そうして説明を受けた後トイレに行く振りをして、フィリップに連絡した。フィリップはあまり驚いておらず、

「なるほど、興味深いね。つまり簡潔にまとめると、君は組織の陰謀と計画の証拠と新型ウイルスの特効薬が欲しいんだね？ 僕もそろそろ組織への潜入を始めるよ。」と言った。そして僕は、

「フィリップ、お前は頭はキレるが、こういった潜入や対人系のことは向いてない。危険だし、俺たちが組織に探りを入れるていることがバレるぞ。」と言った。フィリップは

「心配ご無用さ。僕にまかせてくれ。」

と自信ありげに言った。

正直心配で仕方なかった。彼とは知り合ってそこまでの月日は経っていないが、彼は頭がいい。反面、誰でも知っているような当たり前のことを知らなかったりする。なぜなら、彼の頭の中には地球上すべての知識が詰まっているが、彼はそれをすべて閲覧したわけではない。つまり、彼が記憶をなくしてから聞いてないことなどは、知らなかったりする。一抹の不安を抱えつつも、彼にも潜入捜査をしてもらうことにした。とりあえず僕は研究員になりすましこの計画の証拠を見つけ出す。そうだ、これほど大きな計画にはきっと計画書あるはずだ。ここにいる僕と同じ研究員に聞いてみよう。

そうして大人しそうな雰囲気の研究員に聞いてみた。

「この計画の計画書ってどこにあるのか知ってる？」

そうすると、

「計画書は、会長や社長そして幹部クラスの間人間しか見ることはできないんだ。まあ、伊坂先生は社長のお気に入りだから、確か伊坂先生の研究机に計画書のコピーはあるはずだよ。でも暗証番号と鍵がないと机の扉は開けることはできないんだよ。」と言われた。

66

そうして「ありがとう。」と返事をした時に最後に、「そういえば、君はなんでそんなことが気になったの？」と聞かれた。

一瞬焦ったが、そこはポーカークフェイスで誤魔化すのも探偵の基本だ。真顔で、「いいえ、少し気になっただけです。気にしないでください。」と答えた。

その頃フィリップはカルナコーポレーションの本社へと潜入捜査を始めていた。フィリップは社長の冴子とすれ違った。

そうすると、冴子は「あれ、あなたどこがで見覚えがあるわね。」と問いかけた。

フィリップは。

「申し訳ありませんが、僕はあなたのことを知りません。」と答えた。

すると冴子は確信したように、

「あなた、さては光斗ね。ずっとあなたを探してた。きっとお父様も喜ぶわ。」

フィリップはなんだか背中に寒気を感じた。そして、「僕はあなたのような冷たい瞳をした人なんて知らない！」と、強く答えた。冴子は、

「まあ、またいずれあなたの記憶は消すわ。さあ、こっちへいらっしゃい。」

フィリップは危険を感じ、一目散に逃げた。

その頃僕（翔太郎）は証拠となる計画書を盗もうとしていた、伊坂の備品整理をしていると見せかけて書類を奪う作戦だった。伊坂が会長に呼ばれたといい研究室を出ていった。今がチャンスだ。今しか計画書を奪い取るしかない。ずっと伊坂を監視していたが、伊坂は鍵を保管している金庫のパスワードを万が一忘れないために机の裏にメモに書いていた。そして備品整理をしているように見せかけ伊坂の机に近づいた。順調に伊坂の机の鍵を入手し、机の扉を鍵を使って開けた。もしこんなことをしているのがバレたら、一発でアウトだ。このときは緊張しすぎて手が震えていた。そうして計画書のファイルを手にした時に、さっき伊坂の計画書の場所を聞いた研究員に

「何をしていますか？」と声をかけられた。

しまった、このままではすべてがパーだ。それによりさらに緊張し、手の震えが止まらなかった。そして研究員が

「そのファイルはなんですか？ 見せてください。」と迫って来た時は正直終わった、と思った。

その頃、フィリップは冴子とその部下たちにずっと追いかけて回されていた。冴子は何としてもフィリップを捕まえたい理由があるのだろう、フィリップはすぐさま翔太郎に連絡した。

「翔太郎。今、組織の社長や幹部、その部下たちに追いかけている。助けてくれ！」

僕は、

「わかった。お前の位置情報をたどって合流しよう。」と伝えた。

こうしてこの事件はクライマックスへと行き、この後僕たちはすべての真相を知ることになる。そうしてフィリップはたまたま伊坂と会長の聡太が対談している部屋へと逃げ込んだ。伊坂は驚き、

「誰だ、貴様は！」と大声で言った。そこへ冴子とその部下たちが追いついた。そこで聡太は冴子に

「これは一体どういうことだね？ 冴子。」と聞いた。冴子は

「お父様、やっと見つけました、光斗を。」

そうすると聡太はとても驚き、

「何？ まさか彼が光斗なのか。はっはっは。」と、嬉しそうに笑った。そして、

「光斗、久しぶりだね。まさか生きていたとは。」と言った。

フィリップは、

「さっきからなんの話をしているんだ。僕は光斗なんて名前じゃない。僕の名前はフィリップだ。」

と言い返した。そして僕（翔太郎）がその部屋へ乗り込んだ。

「あんたらの計画はここまでだ。ここで観念しな。」と少しかっこつけるように言った。伊坂は驚き、

「まさかお前、新しく入った研究員ってのは嘘で、貴様もスパイだったのか。」と言った。

66

「遡ること十分前、研究員に計画書を盗もうとしていることがバレそうになった僕だが、念のためにと備品整理の備品リストのファイルの色を計画書と同じ色にしていただから即座に計画書のファイルを机の下に隠し、備品リストのファイルを見せた。研究員は、『なんだそんなことをしていたのか。さっき伊坂先生の机の鍵のこととかを聞き出していたから、てっきり何か変なことをしようとしているのかと思ったよ。』と言いい、彼は立ち去った。そしてすぐさま計画書の写真を撮り警察へと送りつけた、というわけだ。あんたらがどんな恐ろしい計画をしようとしているのかがすべてわかったぜ。大人しく観念しな。」と伝えた。

そうすると聡太は笑いながら、

「そんなことをして、君になんの得がある。」と質問した。

僕は、

「お前たちが作ったウイルスのせいで今世界中は大混乱になっている。たくさん的人也死んだ。お前たちのくだらない計画のせいでどれだけ多くの人間の未来が奪われたと思っているのか。」と怒りを抑えつつも聞いた。すると聡太は、

「翔太郎くんだったかな。私はね、この世には優れた人間のみが生き残るべきだと思っている。そのためにはこの新型ウイルスを使ってこの世にいるなんの役にも立たないクズどもを殺すことも厭わない。私はただ選別がしたいだけなんだよ。愚かな人間には永遠と眠ってもらい。優れた人間のみを残す。そうして進化してこそ万物の霊長だとは思わないかね？」

彼の目は真っ直ぐだった。彼は冗談を言っているのではない。彼は本気でそれを正しいことだと思っているのだ。だが俺は、絶対にそれは正しくないと思った。人間皆助け合って生きていくのだから、それを聡太に伝えたが彼は全く関心を示さなかった。そして聡太は、

「光斗や私の妻もそうさ。奴らは私の家族なのに無能で、私の考えに理解を締めさなかった。だから私は日本人の妻を殺し、光斗を実験体にした。だがまさか光斗が活着ているとは思わなかったよ。彼の脳に埋めたチップはね、エクストリームメモリという地球のすべての知識が入っているだが、そのシステムを導入するには実験が必要だった。だから光斗はチップの副作用で記憶を失った。彼の名前はフィリップなんかじゃない光斗だよ。」と言った。するとフィリップは苦しうにその場でうづくまった。

「嘘だ。この人たちが僕の家族だなんて。」

僕は怒りが込み上げてきた。そして聡太に聞いた。

「おやっさんいや、石橋宗一という男を知っているか？」

と聞いた。そうすると聡太は、

「あーあの探偵か。組織に潜入し、幹部の地位まで上り詰めたが、我々が彼をスパイだと見抜いたんでね。消させてもらったよ。」と言った。

「やっぱりだ。おやっさんはこいつらに殺されたんだ。それにフィリップにいや、光斗に人間とは思えないようなことまでしている。こいつらは絶対許せない。」

すると聡太は冷たい目で、

「ここまで君たちに知られた以上、生きて返すわけにはいかない。覚悟するんだね。」と言いい、銃を向けた。

もはやここまでか、と思った時に中国警察がここまで乗り込んできた。そうだ、忘れていた計画書を送ると同時に警察に通報していたんだ。100人ほどの特殊部隊の警察が押し寄せてきた。聡太や冴子、伊坂も観念したのか手をあげ連行された。そうして警察は研究所などを調べ、特効薬なども見つかり、その特効薬は量産され、その日からは新型ウイルスの死者は出なくなった。

一ヶ月後にはウイルスは完全に消滅し、この事件は幕を閉じた。主犯の聡太、冴子、伊坂らは実刑懲役20年の判決を受けた。これだけのことをしたのだから当然だ。あれから少しずつではあるがフィリップの記憶は戻りつつある。いつかフィリップはこのトラウマを克服して家族と再会し、初めて家族愛というものを体感できる日が来ることを祈っている。おやっさんの死んだ真相もわかったし、改めて僕はおやっさんの後を継いで探偵を続けることを決めた。そうしてその事件の後から僕とフィリップはずっと一緒に探偵を続けている。時には喧嘩もするが、フィリップは僕にとってかけがえのないパートナーだ。そうして今僕がこのお話を書いているのは2070年、去年フィリップは病気で死んでしまった。それでもフィリップは僕の中でずっと生き続ける。だって僕たちは、二人で一人の探偵だから！

Judges' Remarks:

Shoma has produced a very interesting short story. The setting, characterization, plot and length of story are all exceptionally good. This is a very creative detective story which has an exciting pace.

Japanese is Shoma's first language.



Commendation

Award

日记

黄凯丽
Kaylee Ng
1-LSG

4月3日

今天，我国总理宣布新加坡将实行阻断措施，也就是类似其他国家的封城。下个星期二开始，我得上网学习，因为学生都不可以去学校上课。妈妈和爸爸也要在家里工作。知道了这个消息后，我有些难过，因为我会想念我的朋友。

新病例：65

4月5日

妈妈去超级市场买日常用品后，告诉我有很多人在买酒精洗手液、口罩和必需品，囤积物资。总理劝人们保持冷静，也提醒我们都要保持社交安全距离，防止病毒传播。

新病例：116

4月9日

今天是我第一次上网学习。我很喜欢上网学习因为我可以迟一点起床，不用乘坐公共交通工具去学校。但是，我有更多功课！一些老师觉得上网课不会比在学校教课有效。因为爸爸、妈妈也都居家办公，所以我家里的网速非常慢，影响我上课！

新病例：287

4月15日

我觉得上网学习有优点和缺点。优点是学生在家里上课，老师也在家教课，对大家来说更安全。缺点是学生可以一边上课，一边玩电脑游戏，影响他们的学习效率。但是，我还是比较喜欢上网学习。

新病例：447

Judges' Remark:

Kaylee uses the form of diary to record key events during Covid-19. For a student, home-based learning is naturally a key event that has set students thinking about their education.

Chinese is Kaylee's second language.



无法治愈的病毒

林嘉兴

Aiden Lim Jia Xing

2-THO



望着窗外，李伟看到空无一人的街道，他哭了起来。他知道这一切都是由于两年前犯下的一个错误而产生的。当他的眼泪滑落脸颊时，回忆泛滥成灾。

那时候，李伟生活过得很不好，所以他和奶奶住在森林里的木屋。因为李伟没有钱，所以如果他想吃东西，他必须去森林里打猎。有一天，奶奶出去办事，李伟不得不自己做饭，肚子空空的李伟到森林里去寻找东西吃。

李伟走进森林里。他时刻保持敏锐，希望能捕捉到猎物。突然，李伟听到了微弱的山鸡声，他即刻四处搜索。当他看到山鸡时，他对准了目标射击。“砰！”枪声破坏了森林的寂静，李伟睁大眼睛，意识到自己错过了，而山鸡不在眼前。李伟异常失望。

当太阳开始下山时，李伟自知错过了午餐，却什么也没抓到，只剩下一些野蘑菇。绝望的他决定去附近的一个洞穴里尝试寻找可以配搭蘑菇的食材。他慢慢地走进山洞，突然间有一群蝙蝠飞出山洞。他吓坏了，马上闭上了眼睛，开了几枪。李伟睁开眼睛，发现三只蝙蝠中枪倒地。他为自己的下一餐不仅仅是蘑菇而高兴极了。

李伟喜出望外，把蝙蝠带回家。他到家后就准备好蘑菇并放出蝙蝠的血。蝙蝠去皮后，李伟开始把蘑菇放进锅里煮，然后加入蝙蝠肉。食物煮好后，他立即狼吞虎咽。吃完饭后，李伟还是很饿，但是天已黑了，不能再出门打猎。因此，他拿着容器里的蝙蝠血，没有处理，就当做汤喝下。



就这样，李伟成为第一个冠状病毒患者。他将病毒传给了同在屋檐下的奶奶。等到李伟和他的奶奶出门办事时，病毒更扩散到整个社区。

那是两年前发生的事情，虽然李伟已经康复，但是他的奶奶和无数病患因冠状病毒而死去。有时李伟会认为自己之所以能从病毒中恢复过来，是因为上天希望他见证自己一手造成的破坏。

人类研制了许多疫苗，但是没有一个是成功的，人们渐渐失去了希望，数百万人死亡。关于这种病毒会导致人类灭绝的理论越来越流行，只有时间才能证明我们能否在这场大灾难中幸存。

Judges' Remark:

The work is a fiction that imagines what might be the cause of the pandemic, and how the culprit who caused the global disaster would have felt. The detailed description makes the writing a good read.

Chinese is Aiden's second language.



66 Ah-J 日记

唐祖怡

Joeliane Woo Tronskar
2-TCT



2020年3月9日

正常生活不再的星期六晚上，我带着狗出门，发现街上一片寂静：没有餐馆外排队的人龙，没有骑自行车的孩子，没有夫妻拿着小杯冰淇淋携手漫步。标记我们日常生活的事物 - 往返上下班，送孩子上学，与朋友见面 - 都一一消失了，时间呈现出平稳，无缝的状态。

2020年3月12日

我们不知道病毒是否将持续传播数周或数月，或数年。我们不知道什么时候可以再次感到安全。

2020年3月14日

我一周内第一次离开拥挤的公寓去杂货店购物，并且与超市收银员进行人与人之间的交流。另外，我母亲离开了医院，但我已经好几个星期没有见到她了。我感谢医生在前线勇敢地展开战斗。医院被推到了极限，意大利屈服于一个看不见的敌人。

2020年3月28日

3月的一天，那个敌人拜访了我。

我开始有轻度发烧和干咳，开始担心，看了医生，由于医院人满为患，我被送回家隔离。今天我的身体感觉如何？在毯子下颤抖。眼睛热痒、肌肉酸痛使我难以静止。首先，我失去了身体的触感；然后我失去了对香蕉的味觉。这些损失没有哪一个是特别独特的，在疫情面前。



Judges' Remark:

Joeliane's entry is a poetic and humorous piece of writing. She starts off with observing how the streets have changed due to the Circuit Breaker, followed by the description of Covid-19 as the invisible enemy, ending with receiving a visit from this very enemy. Her last line is especially poignant as she writes: "In the face of Covid-19, no loss is unique. "

Chinese is Joeliane's second language.

一年前の私に..



チユン

Ahn Cheeyoon Olivia
3-SVM

注意：この手紙はチユンさんだけ読んでください

一年前の私に。。。

こんにちは、チユンちゃん。元気？私は一年後のあなただよ。まず、私があなただというのを証明するために、あなたについての事実を書いてみる。あなたは双子座、A型、そして犬が一匹いるでしょ？いたずらの手紙じゃないから、捨てないで一度読んでみて。一年後、あなたは自分の人生で忘れられないとても重要なことを経験する。けれど、緊張する必要はないと思う。ただ、あなたが未来のあなたのためにぜひ守ってほしいことがあるから、私は手紙を書いている。

一番に、私はあなたに家の外での日常の大切さを感じてほしい。あなたの趣味の野球をスタジアムで見たり、家族や友達と映画館へ行ったり、時にはただ公園で一人で歩いたり、あなたは外で色々なことをしている。でも、これらの大切さを感じることがある？今までずっとそれが当たり前のことだから、あなたはよくわからなかったと思う。しかし考えてみよう。もしあなたが一週間ずっと自分の部屋にいななければならないとするよ。それらのこと全部ができなくなる。想像するだけで、すごく息苦しいでしょ？悲しいですが、そんな日が来ます。だから、今は家で携帯電話に夢中になるより、外へ出てたくさん時間を過ごしてほしい。

二番に、あなたは衛生にもっと気をつけて。そうだよ、未来のことは衛生と感染症に関係がある。そしてこれはあなたが今なんかをしても変わらない現実だよ。それでも私があなたにこんなに頼むことは、衛生の重要性を教えるため。私たちは毎日、私たちも知らない、たくさんの細菌に触れて、食べ物を口に入れる。例えば、バスとか地下鉄の吊り革を握ったり、手でお菓子を食ベルことがある。トイレに行った後も手を洗わないことがある。目に見えないけれど、たくさんの人たちが利用するものだからたくさんの細菌があるよ。今まで別に病気にかかる心配がないあなたはこんな生活について深く考えてみたことはないけれど、もしあなたの知っている細菌じゃなくて深刻なウイルスと考えてみよう。どうしよう？あなたが今みたいに家へ帰って手を洗わないで、すぐに何かを食べたら、そのウイルスはあなたの体へ入ってあなたは病気にかかる。あなただけではなくてあなたの家族と友達も一緒に。これを予防するために一番いい方法は手をよく洗うことだよ。全く簡単だけと他にいい方法がないと思う。この習慣はあなたを保護するからぜひ今から毎日手を洗って。

最後に、全てはあなたの考え次第だということを知っておいて欲しい。これは私が最近感じたことなのだ。留学生のあなたは人生でいろんな新しいことを経験する。そんな1日を幸せに過ごす時は素晴らしいと思うが、たくさんのがはじめてだから、私はあなたのおそれも理解するよ。一年後もたくさんの困難がある。しかしそんな状況でもあなたが前向きに考えて、楽しいことを探せば、いくらでも良くなる。現実是不変だし、どうせそうなら心配するよりその内で楽しんで、いつも幸せに生きて。必ず、困難を乗り越えることができると信じている。ポジティブに生きている限り。

私たちは絶対に会うことはできないけど、私のメッセージはあなたの一部になる。じゃ、私が話したこと忘れないで！頑張ってね！

p.s. あなたの未来の希望のために、いいことを言えば、あなたは学校でいい友達を作るし、賞も貰う。あなたの未来に期待してもいいよ。

2020年7月23日の私より
2019年のあなたへ



Judges' Remark:

Chee Yoon produced a creative story with an interesting plot. A warning letter from the "me" in 2019 to the future "me" in 2020. Amazing language skills from someone who has learnt the language in 7 months.

Japanese is Chee Yoon's foreign language.

人与病毒

Cho Heewon
3-LSG



“

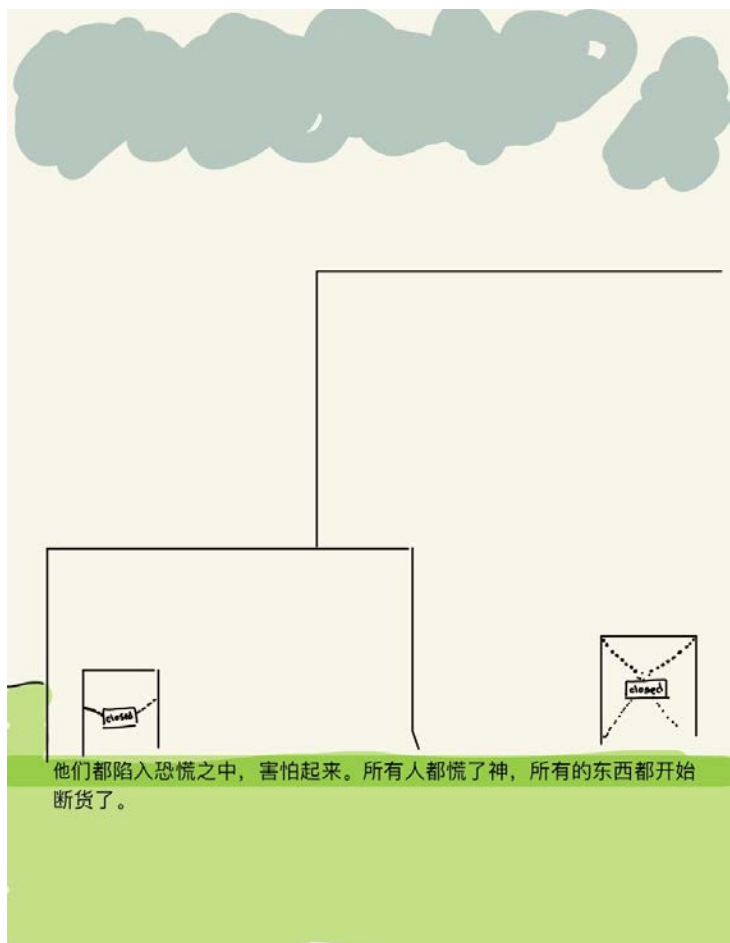
”



神给予的惩罚是病毒。这种病毒对所有人都是致命的、可怕的。

“

”



他们都陷入恐慌之中，害怕起来。所有人都慌了神，所有的东西都开始断货了。

“

”



就在这时，英雄出现了。这是医生和护士。医生和护士们竭尽全力治疗他们。这些英雄们治好了人们，他们立刻恢复了平常心。

66

99



66

99



人人都得到了治疗，人们没有忘记朋友的珍贵，从此他们过上了愉快的生活。



Judges' Remark:

The entry is a very complete artistic and fairy tale like depiction of a story about Covid-19. The illustrations are child-like but effective in the story telling. Language used is good too.

Chinese is Heewon's foreign language.

地球母亲的三千烦恼丝



蔡淑琳

Lauren Chye Shu Lin

3-THO

地球的COVID-19原来是地球母亲为了摆脱在她头发生存太久的讨厌人类而策划的阴谋。众所周知，地球母亲会购买各种配件来装饰她的头发。首先，是恐龙，但它们已经过时了。于是，她用人类来代替恐龙。但是人类对地球母亲的头发造成严重的伤害，使她的头发过于油腻。

有一天，地球母亲找到了她的朋友---月神，并征求他的意见。当然，完全秃顶意味着月神对人类没有什么怨恨。但是，有一次地球母亲离月神太近了，结果月神就有一两个人开始长在他的头皮上。

“你就没有想过采取极端措施来摆脱人类吗？”月神问地球母亲。

地球母亲摇了摇头，笑了。

“没办法！流星太贵了！那一次恐龙们让我的头发发痒的时候，我花了很多钱买了一套流星肥皂来摆脱它们。你有没有好介绍啊？”

月神思考了片刻。

“哦！我想起来了！前几天我看到了一则广告。是这款‘百分百灭虫银河洗发水’。只是它价格非常昂贵，大约要30元。”

66

听到这一消息时，地球母亲感到非常兴奋，因为这与她上次支付的流星治疗相比，这款洗发水仅仅是流星治疗价格的三分之一。她将月神拖到他们当地的超级市场，才发现“百分百除虫洗发水皂”被抢购一空，地球母亲感到很失望。

但是，后来月神发现了另一种产品能解决地球母亲的问题。“看看吧！这是一种物质，可以一举歼灭人类！它只会给人类带来不良的影响。你就不必担心以前购买的可爱大象发夹派不上用场了。”

地球母亲捡起了黑色和黄色的罐子。‘COVID-19全部治愈’……肯定会摆脱人类的机会。”她大声朗读。“嘿，您难道不认为这与我不久前购买的‘SARS安全保证撤除人员’类似吗？”月神耸了耸肩。效果还不太理想，地球母亲发现，‘SARS安全保证撤除人员’很难应用，也没有有效地发挥自能作用。但是，看着‘COVID-19全部治愈’，她决定试一试。（关于‘COVID-19全部治愈’的另一个好处是，仅售12元！物有所值！）

地球母亲拔腿就奔回家，马上去洗了个澡，然后把‘COVID-19全部治愈’在头发上涂抹了。当她这样做时，她意识到摆脱了许多人类，头发质量有了一点改善。但是，大多数人仍然紧紧抓住她的头。不幸的是，下一次地球母亲尝试使用‘COVID-19全部治愈’时，人类已经进化并开始对它起了防御作用了。

“哎呀！”大地母亲怒气冲冲地大叫。“也许我应该投资另一套流星肥皂吧...”

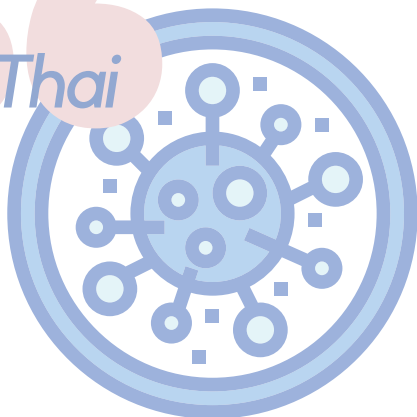


Judges' Remark:

This is a very creative piece of writing. Lauren depicts mankind's destruction of the earth by using the analogy of mankind making mother earth's hair greasy, as such she has to seek help from the moon to look for a shampoo to clean off this grease. When they find a type of shampoo that contains the coronavirus, and just as mother earth is about to wash her hair with it, mankind finds the cure for the virus. And mother earth continues to look for a new shampoo.

Chinese is Lauren's second language.

Thai



Nira Pitiwiwat
3-TCT

ฉันส่งท้ายปี2019ด้วยความหวังว่าปี2020จะเป็นปีที่ดีกว่าเดิม ฉันหวังว่าจะได้รับประสบการณ์มากขึ้น ได้ท่องเที่ยวไปที่ต่างๆ ตามที่ครอบครัวของฉันวางแผนไว้ ฉันมีปณิธานมากมาย ที่คิดไว้ว่าจะต้องทำให้สำเร็จภายในปี2020ให้ได้ แต่ทว่าบางสิ่งบางอย่างก็เกิดขึ้นก่อน ทำให้แผนของฉันต้องล้มไม่เป็นท่า

สิ่งนั้นคือ Covid-19 หรือ Corona virus เป็นอีกสิ่งหนึ่งที่ประวัติศาสตร์จะต้องจารึกเอาไว้...Covid-19ส่งผลกระทบต่อในหลายๆด้านของชีวิตของฉัน ในตอนที่ฉันทราบข่าวเรื่องCovid-19นั้น ฉันกำลังอยู่ที่ประเทศไทย ประเทศบ้านเกิดของดิฉันเพื่อพักผ่อนในวันหยุดปิดเทอมสั้นๆ หากแต่ก่อนที่ฉันจะได้พักอย่างมีความสุขตามที่วาดฝันเอาไว้ Covid-19 ก็ได้มาดับฝันไป เมื่อได้รับข่าวว่าฉันจะต้องเดินทางกลับไป ประเทศสิงคโปร์ ประเทศที่ฉันกำลังศึกษาต่ออยู่ เพื่อป้องกันการติดต่อของเชื้อไวรัส หากแต่ดิฉันไม่รู้เลยว่า การที่ฉันเดินก้าวออกมาจากบ้านที่เป็นที่พักพิงหนึ่งเดียวนั้น ฉันจะไม่ได้ก้าวกลับเข้าไปอีกมากกว่า6เดือน และอาจจะมากกว่านั้น

เมื่อเชื้อไวรัสนั้นกลับรุนแรงมากขึ้น จนกระทั่งโรงเรียนของฉันต้องเปลี่ยนระบบให้เป็นHBL หรือ Home Based Learning เพื่อหยุดยั้งและชะลอการติดต่อของเชื้อไวรัส

66

ในระหว่างที่ติดฉันได้เรียนในระบบHBL

การดำรงชีวิตของฉันก็ต้องเปลี่ยนไปด้วย จากการที่ไปโรงเรียนแล้วได้พบปะเจอเพื่อนๆ

กลับกลายมาเป็นเพียงแค่จอหน้าจอกอมพิวเตอร์ การเรียนในห้องเรียนที่ปกติสิ้นโหล แต่เมื่อเปลี่ยนมาเป็นHBL ทำให้ความเร็วและคุณภาพของอินเทอร์เน็ตเข้ามาอีกหนึ่งในปัจจัยของการเรียน

ถึงแม้ว่าการเรียนแบบHBLจะมีข้อเสีย

แต่นั้นก็ไม่ได้หมายความว่าไม่มีข้อดีเลย ฉันได้เรียนรู้อะไร

อื่นๆที่ไม่เคยรู้มาก่อน ยกตัวอย่างเช่น

ฉันได้รู้ถึงความสำคัญต่างๆในชีวิตที่หากดำรงชีวิตตามปกติ

แล้วเราอาจมองข้ามไปได้ จากสำนวนสุภาษิตกล่าวไว้ว่า

"เปลี่ยนวิกฤตให้เป็นโอกาส" จากการระบาดของไวรัสCovid-

19 ทำให้ฉันมองเห็นถึงความสำคัญของสุขภาพมากยิ่งขึ้น

และสนใจในการออกกำลังกายมากขึ้น

หลังจากการเรียนHBLได้จบลง

วันหยุด2เดือนที่คาดหวังไว้ว่าจะได้กลับบ้านไปหาครอบครัว

นั้น ก็ต้องเป็นพับเก็บลงไป เนื่องจากการระบาดของเชื้อไวรัส

ทำให้การเดินทางยากมากยิ่งขึ้น การขึ้นเครื่องบินกลายเป็น

สิ่งต้องห้าม และแน่นอนว่าการเดินทางกลับประเทศของ

ตนเองนั้นแทบเป็นไปไม่ได้เลยในช่วงวิกฤตเช่นนี้

จากความเครียดที่เกิดจากการสอบมากมายก่อนปิดเทอม

กลับกลายมาเป็นความคิดถึงบ้านและครอบครัวที่ประเทศไทย

คุณพ่อคุณแม่และพี่สาวที่ไม่ได้เจอกันมาเกือบจะเกินครึ่งปี

แล้วนั้น เป็นความคิดถึงที่ไม่สามารถบรรยายออกมาได้

การติดต่อกันทางโลกโซเซียลกลายมาเป็นเส้นทางเดียวที่เรา

สามารถติดต่อและพูดคุยกันได้

หากแต่ในโซครายยังมีโชคดี

เมื่อเชื้อไวรัสCovid-19เหมือนจะเบาบางลงบ้าง

จนทำให้เราสามารถเดินทางออกมาข้างนอกได้บ้าง ตามข้อ

กำหนดของหอพัก ซึ่งก็คือ 2

ชั่วโมง ต่อสัปดาห์ ดูเหมือนจะเป็นเวลาเพียงสั้นๆ

แต่จากคนที่แทบไม่ได้ออกไปไหนเลยเกือบ1เดือนนั้น

คือเป็นเวลาที่มีค่ามาก

โลกข้างนอกที่ไม่ได้ออกมานานนั้น เปลี่ยนไปอย่างมาก จากถนนที่เต็มไปด้วยรถแน่นนั้น กลับเห็นรถเพียงเบาบางเท่านั้น การเดินทางขนส่งสาธารณะเร็วมากขึ้น ผู้คนเบาบางจนแทบไม่มี ทุกคนใส่หน้ากากอนามัย พกเจลล้างมือ และไม่พูดคุยกันอย่างเหมือนเคย ดูเหมือนริบทำธูระของตนให้จบไปอย่างรวดเร็วเพราะคำนึงถึงความเสี่ยงของการออกมาข้างนอก ในช่วงเวลาของวันที่ปิดเทอมที่ผ่านไปอย่างยาวนานกว่าที่คิดไว้ เวลาดูเหมือนจะเดินช้าลงในทุกวันๆ ในที่สุดวันเปิดเทอมก็ได้มาถึง

เมื่อโรงเรียนของดิฉันเปิดเป็นปกติในภาคการเรียนที่3เป็นวันแรกที่ฉันได้กลับไปเจอเพื่อนอย่างพร้อมหน้าพร้อมตา แต่บรรยากาศภายในโรงเรียนก็เหมือนจะต่างไปด้วยการพูดคุยกับเพื่อนดูเหมือนจะเป็นเรื่องที่ยากมากขึ้น เมื่อเราต้องปฏิบัติตามกฎ Social distancing กำจัดและโต๊ะมากมายถูกแปะทับด้วยกากบาทสีแดง สื่อให้เห็นว่าเป็นที่ที่ไม่สามารถนั่งได้เพื่อป้องกันการแพร่ระบาดของไวรัส

ในช่วงวิกฤติเช่นนี้เต็มไปด้วยความตึงเครียดและวิตกกังวล แต่ถ้าหากพวกเราช่วยมือกัน ก็จะสามารถข้ามผ่านวิกฤตการณ์นี้ไปได้ โดยการใส่แมสทุกครั้งเมื่อออกจากบ้าน ล้างมือทุกครั้งหลังกลับมาจากข้างนอก หรือลดการออกไปข้างนอก เพียงการกระทำเล็กน้อย อาจจะสามารถลดการติดต่อของเชื้อไวรัสCovid-19ได้อย่างมีประสิทธิภาพ

Judges' Remark:

Tables and chairs are covered with red crosses, few cars are seen on the road, people out in masks, only being allowed to go out for 2 hours per week, sitting long hours in front of the laptop, the communication seems more difficult than ever, the atmosphere everywhere is full of tension and anxiety. Nira depicts how Covid-19 has changed the way people live from an international student's perspective and she conveys her views in a thoughtful way.

Thai language is Nira's first language.

如果知道是最后一面

任怡萃

Ren Yicui

3-SVM

他说：“等我回来”

又是一个阖家团圆的日子，屋外的孩子们嘻笑打闹，屋内的房间里灯火通明。许是觉得少了些烟火气，她起身走向厨房，打算做些伙食打发了元宵节的晚饭。

虽说丈夫已经离开去前线许久，但冰箱里依然满满当当的全是他爱吃的，好像在他不知何时的归来做准备。她找了一袋汤圆，等回过神的时候才发现将一整袋都放了进去。他在那边有没有吃汤圆呢？她愣神地拿着空袋子想。蒸腾的热气迎面袭来，伴随着的是汤圆散发出的浓浓米香。

桌面上两个白瓷碗里装着满满的汤圆面对面放着。大抵是刚从锅中盛出来，腾腾的白雾直往上冒。她坐在桌子的一边，舀了一只汤圆放入口中。白瓷相撞的叮当响和入口即化的小汤圆在冬日里增添了些许暖意。透过薄薄的白雾，她仿佛又看见自己的丈夫坐在对面说着那一句快被重复烂了的话，“你看，这白瓷碗盛上汤圆和冬日岂不是很相配？”

他们用着同样的碗，吃着同样的食物，可是却再也感受不到相同的人间冷暖。丈夫不忍世人饱受病毒的折磨，毅然决然地踏上了去挽救他人性命的征途。妻子无法阻挡他的步伐所以也只能在家里日日念经，祈祷他万事顺意。“世人都希望你能有所作为，我只希望你能平安归来。”她在送别他的时候念叨着。

他们道别时没有拥抱，没有哭泣，就好像彼此都认定这只是一次短暂的分离。如果知道那是我最后一次见你，我一定不会放开我的手。或许是被热气腾红了眼，她睁着红红的眼睛盯着对面的墙，好似那墙里能走出来个人一般。“我看到新闻了，他们说你是勇士，面对这疫情一丝胆怯也未曾流露过，只要有患者你就不会停歇片刻，每天都在死神手里抢人。可是你把他们的命看的如此重要，那你自己的呢？说好了会回来的，怎的就杳无音讯了？”一想到最后离别的场面，她的泪水就再也绷不住了，如决堤的洪水一般从眼眶滑落，掺杂在汤里。也不知吃进去的到底是芝麻馅儿的汤圆还是饱含思念的泪水。

自从丈夫离开后，她也的确一夜之间长大了许多。懂得了珍惜身边人，许多温情暖意再也不遮着掩着，一有空就回家陪妈妈做饭陪爸爸下棋。把他在世时未说过的话都说一遍，未做过的事都做一遍，大概也算是延续了他的生命，让他换了种方式活在自己身边。可是这些为什么不早些说早些做呢？当初在一起时那些为柴米油盐而引发的争吵此时此刻都令人忍不住怀念。虽然没有轰轰烈烈但至少平淡长远。可这怀念着却又忍不住后悔起来。这些动听的话说是说出了口，想听的那个人却永远都不会回来了。如若早些时候没有那么多纠纷，现在自己是不是也会少些懊悔了呢？

Judges' Remark:

Yicui uses the angle of the wife of a medical staff to show the hardship and sacrifice in the face of the pandemic. A good piece of writing.

Chinese is Yicui's first language.



冠状病毒随想

陈豪盛

Trey Conrad Indradjaja

3-THO

“记得戴你的口罩和要洗手。”

“确保你和别人保持至少一米距离。”

“放学后马上回家。”

好吧。

“航班取消了。”

“不能运动。”

“不能去学校。”

“不要走出家门。”

哦。

当你尝试通过睡眠打发时间，睡眠变成更难。三个选择：玩游戏、读书或上网。我不安地呆在床里，胡思乱想，同时继续盯着天花板。无聊没有一次会自动消失。

“我不应该浪费时间。我一定要继续学习。”

空虚使我更烦躁。在房间里，我学习了好几个小时，可是还觉得不够。我应该放松，为什么我并不开心？我仿佛跌入一个无底洞。

烦恼。压力累积。

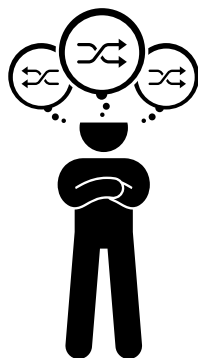
令人沮丧的时期。暂时失去所有平常活动。所有人的烦恼像多米诺骨牌效应，一旦开始就不会停止，直到每个人都受到影响。

世界各地政府防毒也无济于事。低估、迟钝、无视，无法沟通。已经八个月了还继续上升。世界一片乱七八糟，人人自危，抢购基本用品。清单继续。

Judges' Remark:

This is a reflective piece of writing that covers a wide range of topics. Although not in-depth, it shows Trey's thoughtfulness and his ability to express himself adequately in the writing.

Chinese is Trey's second language.



コロナと共の高校生活の思い出

柏木雄輝

Yuki Kashiwagi

4-TKK

今日は2022年の12月、そして高校生として過ごす最後の日だ。僕は第一志望の大学に入れることが確定し、深夜にシンガポールから日本へやっと戻ることができる。9年前に日本から出た時からの願いが、少し寂しくも感じるが、ようやく叶う日が来たのだ。

朝起きた瞬間から、僕は学校に行く支度をした。そう、今日は僕の卒業式でもあるのだ。準備が終わると、家族と一緒にタクシーに乗って学校へ行った。卒業式が行われる会場はとても広く、同級生たちの親や親戚などがずらりと席に座っていて、僕は人の壮大な数に圧倒され、緊張感が増してきた。初めは、親友のスピーチから始まった。彼はみんなのこの6年間の苦労や楽しみなどを感情的に観客に伝えた。もちろん、2年前の狂気、新型コロナウイルスが引き起こしたパニックと困難の事も強く伝えている。確かに、あの一年は信じられないほど大変で、疲れる一年だった。今日やれることはあの年と比べると嘘のように変わっている。卒業式みたいな大勢の人が集まるイベントは禁止、サーキットブレーカーで友達と会うこともできなかつたし、今日みたいにタクシーに乗ることなんて感染のリスクが怖くてできなかつたな。

卒業式が終わると、会場内の全員が涙を流していた。親、生徒、先生、もちろん僕も。最後にとった集合写真は一生ものの宝物だろう。2年前だとソーシャルディスタンスなんかがあつてこんなことはできなかつたはず。2年前に卒業した先輩方が可哀想だと身が引き締まるように思った。

66

これからは友達たちみんなと最後に遊ぶ予定だ。セントーサに行って、16人一緒にバーベキューして、日が暮れるまで遊ぶと決めた。ああ、なんて楽しいのだろう。今日のようにみんなが集まって笑える日なんてまた来るのだろうか。こんな機会はもうこないかもしれないことを考えると、寂しくなってしまう。まあ今日は、2年前のようじゃなくて、5人以上でも外に遊びに行けることを感謝して、心配なんて捨てて精一杯楽しもう、と僕の親友が言ってくれた。確かにそうだ。もし、2020年に人々が協力して、ステイホームなどしていなかったら、新型コロナの影響がもっと拡大して、こうやって全員で楽しめる時間は来なかったかもしれない。この一日のことは一生記憶に残したいし、精一杯遊ぶことにしよう。

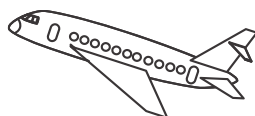
もう日が暮れて、家へ帰る時がきた。僕は、最後に友達との写真を撮り、なぜかみんなに胴上げされながら彼らとの最後の時間を過ごした。2年前にこんな光景を誰かに見られたら、ソーシャルディスタンスしてない僕らは叱られていたかもな。全員が満足するまではしゃいだ後、僕はみんなにお別れの言葉を告げて、笑顔と共に一人でバスに乗った。また、全員で集まることはもうないだろう。何しろ、みんな行く国が違って、休みのタイミングが違って、やりたい仕事も全く違って、みんな忙しいのに全員集合できるなんて奇跡だ。それでも、本心は、またみんなと会いたいと言っている。その奇跡が起こることを願うしかない。だって2年前も、コロナが1年間で収まるのが奇跡だと思いながら、その奇跡が起こったのだから。そう考えながら、僕は一人で家に帰った。

家に戻った瞬間、日本へ飛ぶ支度を始めた。準備が終わると、僕は犬のコロンと二人で散歩に出掛けた。こんな可愛い犬と歩けるのも、日本にいったらシンガポールに戻ってくるまでできなくなるのか。今まで忙しくてそんなに散歩に行けなかったから、少しだけ後悔の気持ちが込み上がってくる。サーキットブレーカー中は二日に一回行っていたのが、あの頃は結構面倒だと思ったの今は恋しくなってきた。

家に帰ると、僕はすぐにキッチンへ向かって、夜ご飯を作り始めた。僕の趣味は料理で、これもサーキットブレーカー中に興味が出て、最近では毎日ご飯を作るほど好きだ。これから長い間家族のためにご飯を作ることはできなくなるから、今日は一段と気合を入れて、家族もみんな満足そうだった。こうやってご飯を作ることなんて、ステイホームが無かったら料理してみようなんては思わなかったはずだ。今、こう考えてみると、サーキットブレーカーは僕に色々な機会を与えてくれたし個人的には好きだったな。

支度が終わると、コロンに顔を舐められながら涙を流し、空港へ向かった。意外に空港に行くのは3年ぶりだ。最後に行ったのが2019年、ヨーロッパに旅行に行った時。その後は、コロナのせいで旅行やCASに行けなかったり、IBが忙しかったから空港に行くことは無かった。空港に着いたらそこには3年前に見た光景があった。人々が密集していて、何事もなかったように飛行機も運行している。2年前は外国の大学に行くことも信じられないほど大変だと聞いたのが、たった2年でこれまでコロナ前の日常が戻っていることが嘘のようだ。飛行機に搭乗するのは1時間後、そしてそろそろ家族とも一旦お別れ。簡単なお別れの挨拶を交わして、手を振りながらみんなから離れた。一年もしたらまた会えるはずだし、そこまで大袈裟なお別れは必要ないだろう。それに、お別れも悲しいけど、大学生としての生活がとっても楽しみだ。不安もあるけど、2年前のコロナの新生活にもすぐ慣れたし、多分大丈夫だ。

そう思いながら、1時間はあっという間に過ぎ、僕は飛行機に乗り込んだ。コロナウイルスとの生活、高校生としての生活は終わり、次は大学生として過ごす日の始まりだ。





Judges' Remark:

Yuki produced a quality piece. A day of reflection at the point of graduation makes us reflect on the pandemic in the year of 2020, from the perspective of future. Mixed feeling of growing up as well is captured in the writing. A very pleasant read.

Japanese is Yuki's first language.

Trà và cà phê

Châu Nguyễn Khánh Giao
5-TKK

Một ngày mới lại đến, ánh nắng vàng chiếu qua khung cửa sổ của tiệm cà phê. Tám giờ mười phút sáng, vị khách đầu tiên đến. Cô luôn đến vào đúng lúc này mỗi ngày, và gọi một ly trà nóng. Tên cô gái là Nguyệt. Tôi nghe được qua những lần cô gọi trà. Mái tóc đen dài đến ngang lưng và dáng người mảnh khảnh càng tô điểm thêm nụ cười dịu dàng như ánh trăng của cô. Mỗi ngày, Nguyệt đều ngồi lại quán chúng tôi đọc một quyển sách hoặc làm việc cùng với chiếc máy tính màu hồng. Thường cô ngồi rất lâu, đến trưa thì sẽ rời đi. Có khi là đi cùng với vài người bạn, hoặc một mình. Nhưng không khi nào cô rời quán mà quên chào tôi cả. Tôi cảm thấy rất vui vì Nguyệt luôn nhớ đến tôi như thế.

Tám giờ bốn mươi phút, lại một vị khách nữa đến. Anh cũng đến vào giờ này mỗi ngày, gọi một ly Americano. Anh tên là Nhật, chàng trai hay ngồi cạnh cửa sổ. Tôi luôn nhìn thấy anh ở cạnh khung cửa sổ cuối cùng bên trái của quán, nhâm nhi ly cà phê và ngắm nhìn đường phố. Đôi lúc anh sẽ mang theo bên mình một chiếc máy đọc sách, nhiều khi lại là một tập giấy vẽ tranh. Vài lần tôi thấy anh mang theo máy ảnh có kiểu dáng cổ điển màu nâu. Nhật có rất nhiều sở thích. Đó là những gì tôi kết luận được. Là một chàng trai khá kiệm lời, anh không hay chào tôi như Nguyệt nhưng có vài lần tôi thấy được anh đưa ống kính chiếc máy ảnh kia về phía tôi và dường như anh cũng đã từng vẽ tôi.

66

99



66

Một ngày như mọi ngày, một ly trà đã được gọi vào lúc tám giờ mười phút và một ly cà phê vào lúc tám giờ bốn mươi. Nguyệt ngồi gần quầy tính tiền với chiếc máy tính màu hồng và Nhật bên cạnh của sổ cùng với tập giấy vẽ. Hôm nay Nguyệt mặc một chiếc áo sơ mi màu vàng cùng với một chiếc chân váy bút chì màu đen. Chân máy cô chốc chốc cứ cau lại. Nhật thì vẫn đơn giản như mọi ngày áo thun trắng, quần bò và tập giấy vẽ. Tôi để ý thấy, hôm nay Nhật nhìn về phía Nguyệt rất nhiều. Có lẽ cậu ấy đang vẽ lại Nguyệt, vì dù sao hôm nay họ là hai trong số những vị khách ít ỏi của quán.

Lại là một ngày như mọi ngày, nhưng hôm nay tôi có cảm giác rất đặc biệt. Hôm nay, tôi thấy họ nói chuyện cùng nhau. Lần đầu tôi thấy Nhật mở lời với ai đó. Anh bảo anh rất thích quyển sách cô đọc, anh hẳn phải rất thích sách để có thể bắt chuyện với một người lạ chỉ vì quyển sách cô ấy đọc. Và họ nói chuyện với nhau một lúc rất lâu, cho đến khi Nguyệt nhận ra mình đã trễ giờ hẹn với bạn và gấp gáp rời đi. Tôi thấy được rõ sự hụt hẫng trong ánh mắt của Nhật. Có lẽ anh ấy không thích sách như tôi nghĩ, mà anh đã say nắng cô gái mang tên mặt trăng mất rồi.

Những ngày sau đó tôi luôn thấy họ trò chuyện cùng nhau, đôi khi là về những quyển sách, một bộ phim hay chỉ đơn giản là ngồi im lặng nhìn nhau. Tôi thấy được nhiều hơn nụ cười dịu dàng như ánh trăng ấy của Nguyệt và sự tự tin của Nhật cũng tăng trông thấy. Nhìn họ như

thế tôi cảm thấy rất vui, như thể quán cà phê nhỏ bé này thật sự đã mang đến niềm vui và sự kết nối cho hai con người chứ không đơn thuần chỉ là những món đồ uống.

Đã quá chín giờ, Nguyệt vẫn chỗ ngồi cũ, nơi gần quầy tính tiền. Tôi để ý thấy hôm nay, tâm trạng cô có ti không vui. Cô cứ bồn chồn, không yên, thi thoảng lại xoay sang nhìn về hướng khung cửa sổ cuối cùng bên trái của quán. Hết mở máy tính ra rồi lại tắt đi, một trang sách cũng được cô lật đi lật lại rất nhiều lần đến mức cong cả mép. Ly trà hôm nay Nguyệt uống rất nhanh, thế là cô lại gọi thêm cả bánh ngọt và sữa. Cứ như thế cho đến xế chiều, cô đứng dậy, thu dọn đồ đạc và bỏ đi, còn quên cả việc chào tạm biệt tôi. Cả buổi chiều hôm đấy, tôi đã nghĩ rất nhiều và tôi nhận ra, tình cảm của Nhật dành cho Nguyệt không phải từ một phía. Bằng chứng rõ nhất là chỉ có một hôm anh không đến quán mà cô đã không vui đến thế rồi.

Hôm sau, Nhật và Nguyệt vẫn đến như thường lệ. Hôm nay có gì đó giữa họ khiến tôi cảm thấy có chút ngọt ngào. Họ không chào nhau khi gặp nhau nữa. Nhật không còn mang ly cà phê của mình sang bàn của Nguyệt ngồi như vài hôm trước. Cô cũng không nhìn ra khung cửa sổ bên trái đó nữa. Chuyện gì đã xảy ra vậy? Rõ ràng là tôi biết họ có tình cảm với nhau, và tôi tin họ cũng biết thế. Hay là tôi sai? Có lẽ tôi đã hy vọng quá nhiều chăng? Tình cảm là một thứ gì đó rất kỳ diệu nhưng cũng rất mong manh. Nó có thể xảy ra trong một khắc mắt chạm nhau, nhưng cũng có thể biến mất sau một đêm.

“66”

Không khí hôm nay càng nặng nề hơn. Dù là ngồi ở góc khuất trong quán nhưng tôi vẫn có thể nghe rõ mồn một những gì họ nói:

“Có gì thì mình nói chuyện giải quyết đi, được không?”. Nhật hôm nay có vẻ còn e dè hơn mọi khi.

“Còn gì để mà nói sao?”. Tôi nghe thấy sự rung rẩy trong giọng nói của Nguyệt.

“Không phải như cậu nghĩ đâu. Thật đấy, hãy cho mình cơ hội giải thích đi, Nguyệt à!”. Anh đã hơi lên giọng với cô, tôi thấy đôi vai gầy ấy run lên.

“Mình nghĩ chúng ta nên tạm không nhìn mặt nhau một thời gian. Mình cần suy nghĩ một số thứ”. Nói xong Nguyệt đứng lên bỏ đi. Tôi thấy những giọt nước mắt được vội lau đi trên khuôn mặt mang nhiều nỗi u sầu kia. Về phần Nhật, thì anh ngồi đấy ngồi đấy, ly cà phê đã cạn từ lâu nhưng anh không có vẻ gì là muốn rời đi cả.

Dạo gần đây, số lượng khách ghé đến quán tôi ít đi hẳn, nhân viên cũng ít đi làm hơn. Tôi nghe chủ quán nói là do đại dịch nên mọi người không ai ra ngoài quán cà phê cả. Tần suất thờ dài của chủ quán ngày càng nhiều. Vì thế mà tâm trạng vốn đã buồn của tôi, giờ đây càng chùng xuống nặng nề hơn. Nhật và Nguyệt vẫn đến nhưng không còn thường xuyên như trước. Chủ quán bảo tôi, sao mà không còn tươi vui như trước nữa, tôi cũng không biết. Vì sao chuyện

66

”

cãi nhau của những người không quen biết lại có thể ảnh hưởng đến tôi như thế? Vì sao tôi lại thương cho họ đến vậy? Tôi thật sự cũng chẳng hiểu nổi chính mình. Chuyện cứ kéo dài, cho đến một ngày, tấm biển 'Closed' vẫn được treo ở đấy dù đã quá giờ mở cửa.

Chủ quán bảo là có thể chúng tôi sẽ không thể đón khách trong vòng một tháng tới. Vậy có nghĩa là sẽ không có ai đến chào tôi, không có ai đến chụp ảnh tôi hay lưu lại tôi trong tập tranh vẽ của họ nữa. Một tháng dài, tôi sống với số ánh sáng ít ỏi len qua các khung cửa sổ của quán cà phê. Cứ tưởng thế là hết, nhưng một tháng ấy lại kéo dài thành hai. Mỗi ngày trôi qua tôi đều cảm thấy rất dài. Nhưng nỗi lo âu của tôi, nếu so ra thì sẽ chẳng là gì so với chủ quán cả. Tôi thấy anh buồn lờ lờ thờ dài nhiều hơn mọi khi, đôi lúc còn nói với tôi nếu mình bán quán đi để có tiền trang trải thì sao? Đương nhiên là tôi không muốn thế rồi, tôi nhận ra tôi yêu quán cà phê này. Tôi yêu từng vị khách đến đây, yêu Nhật, Nguyệt và cả chủ quán nữa. Nhưng tôi thì không thể ích kỷ vì tình cảm của mình mà khiến chủ quán phải chịu khổ được, tôi không có cái quyền đó. Nếu cuối cùng anh vẫn quyết định thế, thì tôi sẽ buồn lắm, nhưng vẫn sẽ theo anh dù anh có chọn điều gì đi chẳng nữa.

Sang đến tháng thứ ba, mọi thứ cuối cùng cũng có tí sức sống trở lại. Một số anh chị nhân viên

66

đã bắt đầu qua lại làm việc. Nhưng bàn ghế trong quán lại được sắp xếp rất khác. Có những chiếc ghế bị dán băng keo đỏ chéo qua chúng và một số chiếc bàn bị chủ quán mang vào kho cất đi. Mọi người cứ liên tục nhắc đến việc phải cách nhau một mét và "giãn cách xã hội". Có lẽ đây cũng là do cái đại dịch ấy. Mặc cho có nhiều luật lệ hà khắc cũng như những thay đổi, nhưng để thấy lại nụ cười trên mặt mọi người, được nghe tiếng trò chuyện vui vẻ, có như thế này tôi cũng thấy đáng.

Quán của chúng tôi đã được đón khách trở lại sau hai tháng. Tôi rất mong chờ được gặp lại các vị khách của quán, mong chờ quán cà phê của tôi trở nên vui vẻ và sống động trở lại, mong chờ Nguyệt và Nhật. Tôi thắc mắc hai tháng qua họ như thế nào? Lần cuối tôi thấy họ thì mọi chuyện vẫn còn rất nặng nề. Tám giờ mười, hôm nay Nguyệt có vẻ đến trễ. Không sao, tôi tự nhủ là có lẽ là do hai tháng không ghé qua nên cô ấy quên đường chẳng. Ba mươi phút sau, tôi cũng không thấy Nhật đến. Tôi đã mong chờ hai người họ sẽ đến. Họ đã quên quán cà phê này rồi, họ quên tôi rồi chẳng? Hoặc có lẽ mối quan hệ của họ thật sự đã kết thúc từ hai tháng trước. Cuối cùng thì Nguyệt vẫn là Nguyệt và Nhật vẫn là Nhật. Họ không thể đến được với nhau....

Mười hai giờ trưa. Giờ thay ca của các anh chị phục vụ. Trong lúc mọi người đang ồn ào thay ca, thì tôi nghe loáng thoáng một giọng nói quen thuộc. Một giọng nói trầm ấm gọi một ly trà nóng và một ly Americano tại quầy. Đó là Nguyệt và Nhật, những người mà tôi luôn chờ đợi. Hôm nay, ly trà và ly cà phê được gọi cùng một lúc chứ không phải là cách nhau ba mươi phút

66

như mọi lần. Hôm nay trông sắc mặt Nguyệt tươi tắn hơn. Cô ăn mặc đẹp hơn bình thường và không mang theo máy tính hay quyển sách nào cả. Còn Nhật thì hôm nay đi cùng chiếc máy ảnh. Sau khi gọi đồ uống xong, Nguyệt tiến đến gần tôi, Nhật thì đưa máy ảnh lên và tôi nghe tiếng những tách tách. Sau đó cô ấy cười rất tươi, nhìn về phía tôi và nói: "Lâu rồi không gặp, chào em Hường Dương!"

99

Tôi chỉ là một đóa hoa hướng dương nhỏ bé được trồng trong quán cà phê "Hường Dương". Mỗi ngày tôi đều quan sát những vị khách đến đây. Tôi yêu quán cà phê này, yêu mọi thứ thuộc về nó. Đối với tôi, điều hạnh phúc là được nhìn thấy các vị khách của quán rời đi với nụ cười nở trên môi. Rằng quán cà phê nhỏ bé này đã làm cho một ngày của họ tươi sáng hơn một chút dù có là ở hoàn cảnh nào. Dù đó là một mùa đại dịch, thì đâu vẫn sẽ có niềm vui.

Judges' Remark:

A couple is separated due to some misunderstanding. However, they get back together again when the cafe is back to normal after the pandemic. The work is especially interesting as the narrator is a flower in the cafe.

Vietnamese language is Helen's first language.

Berhenti, Beristirahat, Berdoa

Jesslyne Yau
5-THO

Berhenti,
beristirahat, berdoa
Menurutku inilah
cara yang terbaik untuk menghadapi pandemik
covid sembilan belas ini
Tidak perlu kita gelisah
tetapi berdoa
Cukup bagi kita
untuk mencari Tuhan dan meyakini
Bahwa semua akan didengar
melalui doa

Berhenti,
beristirahat, berdoa
Mau tak mau kita
harus berhenti dari rutinitas kita
Tidak perlu kita
mengeluh cukup bagi kita untuk melihat sisi yang
indah yang tidak dapat dilihat
di ujung benua
Di dalam dunia
ini yang berjalan dengan sangat cepat, terkadang
menimbulkan airmata
Berhentilah
menyusahkan diri kerana memang sudah waktunya
janganlah kita berhenti berdoa

“

Berhenti,
beristirahat, berdoa
Ambillah
kesempatan ini untuk beristirahat dan bersahabat
Meluangkan waktu
dengan keluarga, telefonlah dengan teman, dan
mungkin juga makan cocoa
Tidak usah
pikirkan yang lain, percayalah semua Tuhan akan
menjaga dan melihat
Kerana pada
akhirnya, semua akan berlalu pada saat kita
berhenti, beristirahat, dan berdoa.

Judges' Remarks:

An inspiring and motivating poem depicting the current pandemic situation with emphasis on the need to continue praying. Demonstrated use of good language skills with repetitive phrases to reiterates her points.

Malay is Jesslyne's second language.



Une Adolescence Vivant Ans Nla Pandemie

Nadya Zahra Amir
5-TKK

La première année du programme international de diplôme de baccalaureat! Un nouveau départ en 2020! Tout le monde me dit que c'est une montagne russe; projets, évaluations et beaucoup de travail ! J'étais tellement prêt à commencer une nouvelle vie avec beaucoup de plaisir en perspective!

Puis tout est arrivé.

Au début, je pensais que tout allait bientôt être fini.

Je suis rentrée à l'école le premier jour de retour des vacances du Nouvel An chinois et j'ai été bombardée par un environnement complètement changé. J'ai pris ma température à la porte d'entrée pendant que mon

Housemaster me demandait de signer un formulaire me demandant si j'avais récemment visité la Chine la semaine dernière. J'ai signé non. En entrant à l'école, un océan d'étudiants avec des masques faciaux était tout ce que l'œil pouvait voir.

66

”

Tout était sur le virus. Je ne pouvais pas entrer dans la pièce sans entendre les mots «Wuhan», «virus» ou «mort». Le virus corona a même changé les gens; ceux qui n'avaient même jamais eu le souci de l'hygiène transportaient soudainement des bouteilles de désinfectant pour les mains. C'était bouleversant. Je ne pouvais pas serrer mes amis ou ma famille dans mes bras en public sans qu'on me dise "PAS DE CONTACT" Et la distanciation sociale! Comme des étoiles dans le ciel nocturne, il y avait soudainement des croix au scotch implantées sur chaque sol, chaise et table. Ils annulaient les fameux voyages IB CAS, et tout le monde dans mon groupe d'âge était en colère. Il était impossible de faire une quelconque activité de peur d'entrer en contact avec des gens. Je ne pensais pas que les choses rendraient la société aussi paranoïaque, mais hélas j'avais tort ...

Je me souviens du jour qui a déprimé tout le monde. Mes amis et moi faisons notre rituel du vendredi dans un restaurant italien, lorsque j'ai ouvert les réseaux sociaux: le confinement démarrera officiellement dans 4 jours. J'ai pensé à combien les choses seraient différentes; ne pas pouvoir voir mes amis pendant les 2 prochains mois semblait horrible! Le sentiment soudain d'isolement a commencé à être plus clair chaque jour.

“
”
TJ'étais épuisée d'assister aux cours en ligne. L'apprentissage des études complexes au sein de l'IB semblait devenir plus difficile, j'ai même dû auto-apprendre une danse traditionnelle balinaise pour les cours de théâtre. L'expérience dans son ensemble était, comme je le crois, la quintessence d'une déconnexion de la réalité.

Judges' Remark:

Nadya shares her feelings during the pandemic as she analyses her emotions and frustrations.

French is Nadya's second language.



Hành trình tìm đến ánh sáng

(Tác phẩm này dựa trên câu chuyện của chính tôi)

Nguyễn Yến Minh Phương

Một

5-LSG

Tối quá! Đây là đâu vậy?

Sau một giấc mộng dài, tôi tỉnh dậy trong sự mơ hồ. Tôi không nhìn thấy gì cả, tất cả mọi thứ đều bị bao phủ bởi một màu đen hắc ám tưởng chừng như chính tôi cũng đã chìm sâu vào khoảng không vô định ấy.

Nhưng điều đáng ngạc nhiên là, tôi tự nhiên nhận thức được bản thân mình đang ở đâu. Trong đầu tôi vô thức hiện lên một câu nói ở đâu đó:

"Điều đáng sợ nhất không phải là lạc lối mà chính là nhận thức được bản thân mình đang ở trong tình trạng vô định này mà không tìm ra được con đường nào để giải thoát bản thân ra khỏi trạng thái đó."

Ngày học qua mạng (HBL) đầu tiên tại ký túc xá, ngày đầu tiên tôi không thức dậy trước khi mặt trời ló dạng, chiếu sáng một vùng trời phía Đông chói lọi. Một ngày mới lại bắt đầu. Mọi thứ vẫn diễn ra bình thường. Giáo viên vẫn tiếp tục giảng bài, mọi người chăm chú nghe giảng và đặt những câu hỏi giải đáp cho vấn đề mình chưa rõ ràng. Điều đặc biệt ở những lớp học qua mạng (online) trong mùa nghỉ dịch này là không cần phải điếm danh mỗi tiết học. Tất cả việc học phụ thuộc vào sự tự giác của riêng mỗi học sinh. Cảm giác được tiếp xúc với một cách học mới thật thú vị và hào hứng! Tôi cảm thấy cách học này thật không tồi!

66

99

Đã hai tuần trôi qua kể từ khi HBL bắt đầu. Mọi thứ vẫn bình thường, và tôi vẫn luôn vui đầu mình vào đồng bài tập cao chất chông ấy. Một ngày trôi qua thật lâu nhưng cũng nhanh đến không tưởng. Thời gian ngồi trong lớp dài dằng dằng trong khi thời gian nghỉ ngơi thì nhanh như một giấc mộng. Trong hai tuần học online, thời

gian học hành và nghỉ ngơi của tôi thay đổi rất tự do linh hoạt. Bản thân mình dường như đang chùng xuống và trở nên chây lười. Tôi dần dần mất đi hứng thú với cuộc sống học tập vô vị ở trong ký túc xá này...

Sau ba ngày cuối tuần dài, tôi lại bắt đầu quay trở lại với những buổi học online. Mọi thứ dần dần trở nên ngán ngẩm. Tôi không bỏ sót bất kỳ tiết học nào trong suốt năm tuần HBL vừa qua nhưng có vẻ như tôi không thật sự tiếp thu được gì nhiều. Tôi vẫn ngồi đó trước màn hình máy tính, vẫn nghe giảng và viết những ý chính trong các bài giảng của các thầy cô. Tôi vẫn chăm chỉ hoàn thành bài tập và hoàn thành các nhiệm vụ mà Ban quản trị học sinh (Prefectorial Board) đưa ra. Mọi thứ vẫn diễn ra như bình thường nhưng tôi không còn cảm thấy hứng thú nữa. Tôi đã thay đổi rồi hay sao?

Hai

Hôm nay là ngày của mẹ - ngày dành cho những đứa con thể hiện sự biết ơn và lòng kính trọng của chúng đối với Đấng sinh thành. Tôi thức dậy sớm hơn mọi khi trong quãng thời gian đặc biệt này. Từ 6 giờ sáng giờ Singapore (5 giờ sáng giờ Việt Nam), tôi vội vã gửi tin chúc mừng cùng với những dòng tâm tình của bản thân mình đối với mẹ. Hôm nay tôi thấy rất phấn khởi, cũng hạnh phúc thay cho người phụ nữ đã chịu khổ cực mang nặng đẻ đau chín tháng mười ngày để tạo ra sinh mệnh mới trên trần đời này. Tôi thật sự rất yêu thương và trân trọng người phụ nữ đó - mẹ tôi.

"Nếu có một điều có thể níu giữ lại tôi trên cõi đời này, có lẽ đó chính là gia đình tôi - nơi mà tôi có thể cảm nhận được những tấm chân tình chân thật và mộc mạc nhất. Tôi trân trọng họ - gia đình của tôi."

Ngày cuối cùng trong học kỳ hai. Không chỉ học sinh cảm thấy hào hứng với kỳ nghỉ hè năm tuần sắp tới, sự hưng phấn đó cũng được thấy ở các thầy cô khi kết thúc tiết học ngày hôm đấy. Tôi cảm thấy sự hào hứng trong thâm tâm mình như ngọn lửa đã từng tàn lụi trong lòng được bùng lên một lần nữa.

Tôi thật sự mong đợi kỳ nghỉ này. Chính phủ Singapore từng thông báo các quy định giãn cách xã hội sẽ được nới lỏng vào đầu tháng 6, và hoạt động của các nhà hàng và cửa tiệm sẽ trở lại bình thường.

Tôi thật sự mong chờ điều đó. Sau gần hai tháng trời rỗng rã nhất mình trong ký túc xá chỉ với khoảng thời gian một tuần hai tiếng để đi ra ngoài mua đồ ăn thức uống dự trữ, tôi thật sự háo hức được trở lại với cuộc sống thường nhật trước mùa dịch này.

Tôi mong đợi sẽ lấy lại được nhịp điệu trong cuộc sống mà mình từng có. Tôi lên kế hoạch học tập và nghỉ ngơi với tâm trạng hào hứng và sự nhiệt huyết mãnh liệt trong tâm mình. Có lẽ, tôi đã trở lại là chính mình rồi.

Hôm nay cũng là một ngày đặc biệt của tôi. Lần thứ mười bảy trong cuộc đời tôi được đón lễ Quốc tế Thiếu nhi. Ngày này năm ngoái, tôi đã ríu rít bên tai của ba mẹ tôi một ngày dài và cũng nhận được một món quà được giữ hộ bởi em gái. Nghe có vẻ thật hài hước khi một thiếu nữ vị thành niên gần mười tám tuổi như tôi lại mong chờ một ngày lễ dành cho trẻ nhỏ như thế này, nhưng tôi đã rất phấn khích như một đứa trẻ thơ. Ngày Quốc tế Thiếu nhi năm nay so với năm ngoái có phần khác biệt. Tôi không có cơ hội ở quê nhà để được đón ngày lễ này cùng người thân. Ba mẹ tôi thường nói rằng bước sang tuổi mười tám là trưởng thành rồi, khi đó tôi sẽ không còn là "thiếu nhi" nữa nên hôm nay thật sự là một ngày đặc biệt. Ngày cuối cùng đón lễ Quốc tế Thiếu nhi dưới thân phận của một "thiếu nhi" chưa trưởng thành - chưa mười tám tuổi....

Ba

Đây là lần thứ hai trong suốt quãng thời gian mười năm của tôi trải nghiệm cảm giác ngất lịm. Tôi hoàn toàn không dự đoán trước được điều đó, rằng bản thân mình sẽ ngất xỉu vào quãng thời gian yên bình này, rằng thân thể của mình đã suy nhược đến mức độ này.

Tôi lấy lại ý thức là chuyện của một tiếng sau đó. Một mình tỉnh dậy, tôi lặng lẽ lau đi những giọt mồ hôi vươn trên trán và tóc mai. Hôm nay tôi lại một mình. Kể từ ngày Quốc tế Thiếu nhi, gia đình tôi ít dành thời gian để trò chuyện với nhau hơn. Tôi cũng ít gặp bạn bè hơn và nhất mình trong bốn bức tường. Hơn thế nữa, do tình hình Covid-19 vẫn còn căng thẳng, thời gian ngừng giãn cách vẫn chưa được xác định. Không thể liên lạc được với ai, càng không thể ra ngoài tận hưởng cuộc sống. Thật nhàm chán! Ôi, coi như xong rồi....

Không gian được bao trùm bởi một màu đen u ám. Không có bất kì một tia sáng nào len lỏi được vào nơi đây - một khoảng trống. Trong hắc ám yên tĩnh đến choáng ngợp, tôi cảm thấy sợ hãi. Sợ hãi sự tĩnh lặng này, sợ hãi khi không biết được mình đang ở nơi đâu, sợ hãi khi nhận ra mình không còn cảm nhận được bản thân mình nữa.... Tôi cùng với hắc ám vô tận đã hòa quyện lại thành một.

Người ta nói đáng sợ không phải là nhìn thấy được một cơn bão hiện diện trước mặt mà là sự yên bình trước cơn bão. Ta có thể nhận diện và dự đoán mức độ tàn phá của cơn bão qua sức mạnh và hình dáng của nó. Vì một lý do nào, đoán được nguy cơ cũng mức độ thiệt hại khiến cho ta cảm thấy dễ chịu hơn so với việc phải đối mặt trong tình trạng không đề phòng.

Ngược lại sự yên bình của nó khiến chúng ta không thể cảm nhận được bất kỳ nguy cơ nào, sự yên tĩnh đến lạ thường, sự yên lặng khiến ta bồn chồn, sự tĩnh lặng đến hoảng sợ. Sự yên lặng ấy khiến cho ta không thể phán đoán ra được chuyện gì sẽ xảy ra sau đó và đẩy ta vào thế bị động. Điều đó thật không thoải mái chút nào.

Bốn

Tôi không cảm nhận được bất kỳ điều gì, kể cả về khái niệm thời gian. Có lẽ tôi đã ở đây rất lâu rồi, hoặc cũng có thể không phải như tôi nghĩ, nhưng khái niệm về thời gian có lẽ đã bị bỏ rơi từ rất lâu ở nơi đây. Mọi thứ chìm trong sự tĩnh lặng. Bỗng một giọng nói ma mị vang lên, phá vỡ sự yên bình thuở ban đầu:

“Bạn có thể ích kỷ và kết thúc mọi thứ chỉ trong vòng một nốt nhạc”.

“Bạn là ai?”. Tôi giật mình khi nghe thấy giọng nói ấy cất lên một chất giọng lạnh lẽo thấu tận tâm can xương tủy. Sự xuất hiện đột ngột này tôi không kịp định hình lại.

Tôi là bản thể được tạo ra từ những dòng suy nghĩ của bạn.

"Nếu bạn đã đạt đến giới hạn của mình, hà cớ gì lại còn cố gắng vùng vẫy để càng tổn thương bản thân mình hơn?"

Tôi ngạc nhiên khi nghe thấy câu hỏi ấy. Đúng vậy! Lý do để bản thân mình tồn tại trên cõi đời này là gì? Một suy nghĩ chợt lóe lên. Tâm tình vốn tĩnh lặng như mặt hồ nay nổi lên từng gợn sóng lăn tăn thể hiện sự nhiễu loạn trong tâm trí của bản thân.

"Nếu bạn cứ suy nghĩ về họ thì bao giờ mới đến lượt bạn quan tâm đến chính mình? Kết thúc chính là sự giải thoát, không chỉ cho riêng bạn mà chúng tôi cũng thế! Bạn quan tâm đến họ như vậy nhưng liệu trong lòng họ, bạn có thật sự có một chỗ đứng không? Những điều tốt đẹp bạn chân thành gửi đến họ được đáp trả bằng sự ruồng bỏ và lãng quên. Vậy những điều bạn làm có xứng không?".

"Không! Làm ơn, đừng nói nữa! Đừng nói nữa mà! Làm ơn!". Tôi thống khổ hét lên.

Đầu tôi đau như búa bổ. Những hình ảnh đau khổ từ trong ký ức tuông ra như dòng lũ cuốn trôi đi hết tất cả lý trí của tôi.

“Xin chào các bạn. Mình có thể chơi chung với các bạn được không?”. Trước mắt tôi là hình ảnh của một cô bé sáu tuổi với đôi mắt to tròn với vẻ thiên chân cùng với sự mong muốn được tiếp nhận. Cô bé ấy đang cố gắng hòa nhập với các bạn trong một ngôi trường mới.

“Được chứ! Rất vui được gặp bạn.” Những cô bạn được tiếp cận ấy nở một nụ cười niềm nở chào đón cô bạn mới này.

“Con nhỏ đó ỷ vào việc bản thân mình học giỏi và có chút xinh đẹp mà kiêu ư? Cậu có nhìn thấy ánh mắt nó nhìn mình không? Nó xin vào nhóm của chúng ta, mình cho nó chơi cùng vì thấy nó tội nghiệp, vậy mà nó dám cãi lời mình chỉ vì mình đuổi con Chi ra khỏi nhóm? Mấy cậu bơ nó đi! Đứa nào nói chuyện với nó cũng sẽ bị cô lập như nó.” Nào ai có thể tưởng tượng được rằng lời nói cay độc này phát ra từ một cô bé với một khuôn mặt xinh xắn như thiên thần.

Nhóm bạn nữ tán thành lời nói của cô bé xinh xắn kia và cùng nhau quay về lớp. Nào biết rằng, cô bé kia đã nghe được tất cả.

“Họ bỏ em đi rồi. Em lại không có bạn rồi”. Cô bé đứng trước mặt tôi. Không gào khóc đau thương, chỉ để lại những dòng nước mắt khô trên bờ má hồng hào và im lặng nhìn nhóm bạn ấy. Nhưng đôi mắt đỏ hoe của cô bé không còn vẻ thiên chân vui vẻ như lúc đầu nữa- một đôi mắt lạnh lùng không có linh hồn...

Năm

“Mình rất thích chơi với bạn. Chúng ta làm bạn nhé? Mình vừa mới chuyển sang ngôi trường này. Mong được chỉ giáo nhiều hơn”. Một cô bạn mũm mĩm dễ thương xuất hiện trước mặt cô bé mười ba tuổi ấy. Cô bé ấy đồng ý lời mời kết bạn đầu tiên tại ngôi trường mới cấp hai này.

“Mén ơi, hứa với tao chúng ta mãi mãi là bạn thân nhé?”. Phong cảnh lại một lần nữa thay đổi. Niềm tin của đã cô bé được thắp sáng từ sau lần tổn thương trong quá khứ kia. Trước cửa lớp 8A8, cô bé ấy cùng người bạn mũm mĩm của mình vui vẻ đưa ra lời hứa với nhau, với mong ước ngọt ngào hồng thắm. Họ mong đợi một tình bạn lâu dài, cho dù có xa cách nhau đi nữa.

“Lâu rồi không liên lạc nhỉ? Mà dạo này như thế nào? Học hành có tốt không? Tao vẫn còn ở bên Singapore, không về thăm mày được. Mày giữ sức khỏe nhé! Yêu mày nhiều!”. Bao nhiêu dòng tin nhắn nhưng vẫn không nhận được một câu từ hồi đáp. Cô bé với đôi mắt chứa đầy sự niềm tin vững chắc nhìn chăm chăm vào chiếc điện thoại trên tay mình. Đôi môi mấp máy nhẹ nhàng đưa ra lời an ủi cho bản thân mình: “Chắc là do nó bận học thôi. Nó cũng đã vào cấp ba rồi còn gì”.

“Tút...Tút...Tút. Thuê bao quý khách vừa gọi hiện không liên lạc được, xin vui lòng gọi lại sau...”

“Bạn thân Ú đã lỡ 20 cuộc từ Mên”.

“Lần cuối Bạn thân Ú hoạt động: 27 tháng 10 năm 2019”.

“Tôi đây... chính là lại một lần nữa bị bỏ rơi nữa rồi đúng không?” Cô bé năm xưa nay đã trở thành một thiếu nữ mười sáu tuổi rồi. Viền mắt của cô bé sừng đỏ lên, đôi mắt vẫn nhìn vào cuộc hội thoại giữa mình và cô bạn thân kia. Chúng tôi kết thúc nữa rồi.

“Ba ơi. Hôm nay con có chuyện muốn nói với ba một tí. Ba có đang rảnh không...”

“Ba đang bận nhé con gái. Tối về mình nói chuyện nhé. Tút...tút...tút...”

“Dạ vâng ạ”.

“Mẹ ơi, hôm nay con ở ký túc xá...”

“Mẹ đang lên giáo án con nhé. Lần sau mẹ gọi lại cho con sau nhé!”.

“Dạ vâng...”.

“Wow, hôm nay ba mặc đồ đẹp thế? Ba của con chuẩn bị đi tiếp khách ạ? Ba...”

“Hết mẹ rồi đến con! Cứ suốt ngày hỏi ba đi đâu vậy? Ba đi làm việc cũng không được sao? Nhiều chuyện!!! Tút...tút...tút...”.

“Ba đừng uống nhiều quá nhé, không tốt cho sức khỏe đâu... Hôn ba nhiều.”.

Những hình ảnh cứ bủa vây quanh tôi. Cô bé đó chính là tôi, và tôi là cô bé đó. Tôi lại một lần nữa... bị bỏ rơi rồi ư? Thật sự là như vậy ư? Thiếu nữ ấy gục xuống, đôi mắt vô hồn nhìn về khoảng không bất định....

Sáu

“Đến giờ mà bạn vẫn còn chưa quyết định được ư? Như những gì bạn thấy, Bạn chẳng là gì đối với họ cả. Bạn đã bị bỏ rơi rồi!” Không biết đã trải qua bao lâu, giọng nói ma mị không có độ ấm đấy lại vang lên trong không gian yên tĩnh này.

“Bạn còn muốn chờ đợi bao lâu nữa đây? Sẽ không còn ai tiếp tục ở xung quanh bạn nữa đâu, bạn nên hiểu điều đó chứ!!!”

Khác với những lần trước, giọng nói lần này dường như mang theo sự kích động không hề nhẹ. Trong không gian im lặng đến diệu kỳ này thì một sự thay đổi nho nhỏ cũng sẽ dễ dàng bị phát hiện - sự run rẩy nhẹ nhàng đến từ phía giọng nói. Tôi không trả lời, chỉ im lặng nhắm mắt. Hiện tại tôi không muốn nghe bất kỳ điều gì cả. Tôi cũng chẳng muốn nói hay cử động. Cứ như thế mặc thời gian trôi qua, tôi vẫn không trả lời câu hỏi dành cho bản thân mình.

“Chẳng lẽ giờ đây chính cô cũng muốn bỏ rơi bản thân mình ư?” Như thể hiện tâm tình bồn chồn và kích động của mình, giọng nói ấy như nghẹn lại và càng ngày càng run rẩy kịch liệt hơn, và không gian cũng biến dạng. Chúng nó dường như đang sợ hãi điều gì đó, tôi nghĩ. Tôi cảm thấy cảm phục bản thân mình, trong thời khắc này mà tôi còn có thể bình tĩnh quan sát xung quanh.

“Chẳng lẽ chính bản thân cô giờ đây cũng muốn bỏ rơi một phần của chính mình ư?” Lời nói được lặp lại một lần nữa, nhưng lần này, nó như một tiếng gào thét đau khổ. Gió bắt đầu nổi lên từng cơn buốt lạnh chĩa vào da thịt tôi như đang muốn “thủ tiêu” thứ hiện diện trước mặt chúng vậy.

“Nếu như cô đi theo chúng tôi, vậy thì sẽ không có ai bị bỏ mặc lại cả! Tại sao cô lại không hiểu được điều đó chứ? Cô cũng giống như đám người kia ư, những người đã từng bỏ rơi cô ư. Cô nên hiểu được cái cảm giác ấy thống khổ đến nhường nào chứ!”.

Bảy

“Ting... Bạn có một tin nhắn mới!” Đánh vỡ không gian u ám căng thẳng là tiếng thông báo của điện thoại. Một màn hình lớn hiện ra trước mắt tôi. Tôi thấy được bản thân mình đang nhẹ nhàng rời khỏi giường, tay cầm lấy chiếc điện thoại trên bàn học. Và tôi đọc được những dòng tin nhắn được gửi đến...

“Chào buổi sáng con gái yêu. Chúc con một ngày mới vui vẻ! Lâu rồi hai cha con mình chưa nói chuyện với nhau rồi nhỉ. Con gái dậy ăn sáng rồi gọi điện cho ba nhé! Hè rồi, đừng học nhiều quá, thả lỏng nghỉ ngơi tí đi con nhé! Hôn con gái yêu của ba nhiều!”.

Những dòng tin nhắn ba gửi như một dòng nước ấm chảy vào tim tôi. Tôi một lần nữa cảm nhận được sự ấm áp và tình yêu thương của mọi người xung quanh mình. Cuồng phong ngừng lại, không gian trở lại sự yên tĩnh ban đầu. Mọi thứ hiện rõ ra, kể cả sự hiện diện của những thứ kỳ dị nơi đây. Trước mắt tôi là sự hình ảnh của những nhân hình đơn màu đen cùng với

“đôi cánh kinh dị đầy xương xấu, và tôi ngạc nhiên khi mình có thể nhận diện những “con vật” màu đen trong không gian đen tuyền này. Tôi nhìn thẳng vào chúng và mở lời:

“Tôi có thể có nhiều tổn thương, tôi có thể từng bị bỏ rơi, tôi có thể từng rất đau khổ. Nhưng tôi không thể làm tổn thương những người thật lòng yêu thương tôi. Họ chưa từng bỏ rơi tôi như các bạn nói, họ chỉ bận thôi. Mỗi người đều có cuộc sống riêng của họ, tôi không thể vì bản thân mà than dài than ngắn bắt họ mỗi giờ mỗi phút đều kề bên được. Chúng ta cũng có một cuộc sống riêng của ta mà, phải không?”.

“Tôi sẽ không bỏ rơi các cậu đâu, vì chúng ta là một mà”. Và tôi nở một nụ cười chân thành về phía chúng. Chúng- những sinh vật kì quái ấy, là một phần trong tôi. Chúng là cảm xúc tiêu cực của tôi, là ký ức đau khổ của tôi, là những mặt tối trong tôi, là phần tôi không thể thiếu cũng không thể chối bỏ. Sự tồn tại của chúng cùng với những phần ngọt ngào khác tạo nên tôi.

“... Thật ngu ngốc!” Chúng nhìn tôi và rồi cất lên một câu thở dài. Và chúng biến mất như chưa từng tồn tại.

Mọi thứ trở lại với sự im lặng vốn có như thể chưa từng có bất kỳ dị biến xảy ra nơi đây. Bỗng nhiên xung quanh tôi xuất hiện một vài đốm sáng không gắt gao mà dịu dàng ấm áp bao phủ quanh tôi.

“Hãy đi theo trái tim của bạn. Hãy nghe theo những gì bạn cảm nhận. Hãy suy nghĩ đến những điều hạnh phúc. Hãy là chính bạn.”. Chúng nói.

“Ba mẹ yêu con nhiều lắm!”.

“Mày đi học tốt nhé! Chúng ta có lẽ sẽ không có thời gian để liên lạc với nhau nhiều, nhưng mãi mãi là bạn thân nhé!”

Tôi nhắm mắt lại và đi thẳng về phía trước. Trong lòng không ngừng suy nghĩ về những người mình yêu thương, về những ký ức hạnh phúc và vui vẻ. Chậm rãi từng bước tiến về phía trước, tôi nhẹ nhàng vươn tay về phía trước và đón nhận lấy ánh sáng thuộc về bản thân mình.

Judges' Remark:

The story is about a student who shares her feelings about the pandemic and how she now better understands her relationships with others. The narrative reflects the reality in a student's life during the Circuit Breaker and her candid thought on Home-based Learning.

Vietnamese is Minh Phương's first



El cuento de Flynn

Siddid Umesh Mandi
5-OLD

Era el año 2019 y un virus venía. Ninguno sabía esto, pero había un científico que se llamaba Flynn Taggart, y él sabía esto. Con habilidades de ciencia de riesgos que él había aprendido cuando él terminó su estudios en la Universidad, información especial sobre el futuro. Debido a estas habilidades, él estaba listo para salvar al mundo. Debía ser muy vigilante, por eso hay personas como Flynn.

Flynn es actualmente del futuro. Él viene del año 2097. Él había visto que pasaría después de que una persona descubriera la energía del infierno en Marte. Elon Musk va a Marte y empieza a construir edificios de energía. Poco después un científico que se llama Samuel Hayden, encuentra la energía del infierno. Luego una nueva especie empieza a pelear con los humanos. Son como diablos, muy delgados y tiene dientes muy agudos. Hay muchos tipos, algunos son muy grandes y pequeños. Ellos destruyen a Tierra y matan a todos los humanos. Solo unas pocas personas sobreviven y ellos mandaron a Flynn al pasado para detener todas estas cosas.

Flynn es muy alto y tiene muchos músculos, mide 6 pies 4 y pesa 140 kilogramos. Tiene habilidades de combate y una fuerza sobrehumana. Puede recoger coches, correr muy rápido y saltar muy alto.

“ Cuando el virus que se llama COVID-19 se propaga en el mundo, hay tres personas que mueren. Los diablos los matan a ellos. Pero, en el cronograma, esta Flynn. Deberá salvarlos a ellos. Estas personas están en todo el mundo y dos personas tienen un amuleto especial. Estos amuletos son necesarios para destruir la casa de los diablos. Y al final tienen la tecnología secreta que puede llevar a Flynn a Marte. Flynn sabe quien y donde están estas personas.

INFIENO EN LA TIERRA

La primera persona que Flynn debe encontrar está en Wuhan, China. El brote de COVID-19. El lugar está roto y destruido. Hay muchos cuerpos y en la ciudad no hay ninguna persona. Flynn debe encontrar la casa del científico número uno. Él estaba en una torre grande y alta. Él está en la cima. Como estaba escalando las escalas él vio sangre. Alguien había estado aquí. No, alguna cosa. Flynn empezó a correr encima de las escaleras. Tenía que ser muy rápido. Por suerte, Flynn llegó a tiempo. El diablo no había robado el amuleto todavía. Con la fuerza sobrehumana, Flynn mata al diablo y consigue el amuleto.

SUELO DE GUERRA

El próximo amuleto estaba con un científico en Medio Oriente. El científico había huido para eludir la persecución de los Lusmims, que son ateos. El desierto estaba lleno de colinas de arena, la casa del científico estaba ubicada al lado de una colina. En el desierto hacía mucho calor. Tristemente, cuando Flynn llegó, ellos habían matado al científico por 'crímenes' de blasfemia. Por suerte, ellos no sabían sobre el amuleto. La casa era muy pequeña y el amuleto estaba en una cofre debajo de su cama. Con su fuerza sobrehumana, Flynn fácilmente abrió el cofre y obtuvo el amuleto. Los diablos llegaron demasiado tarde.

EL GRAN VIAJE

Flynn debe ir a Marte para destruir a los diablos. Flynn debe apresurarse, antes de que la gente llegue a Marte. Para viajar a Marte, Flynn tiene que quedar con un científico quien tiene secreto tecnológico para el viaje.

En el futuro, hay experimentos que dan a las personas habilidades de sobrevivir en el clima de Marte. Debido a esto, Flynn no necesita un traje especial. el secreto de la felicidad está en un pequeño pueblo en India. En el sur de India, cerca del océano Índico. Por suerte el científico estaba vivo. La astronave era como una pelota que sería lanzada a Marte. Hay una muy grande catapulta que la lanzará. Hay mucho riesgo, una persona puede morir, pero Flynn tiene habilidades especiales. En cuatro horas, los planetas se alinearían. No hay tiempo, los diablos estaban llegando. Todas las personas en las instalaciones morirían. Flynn no

66 puede protegerlos a ellos.

A las cuatro horas, ellos enseñan a Flynn como utilizar la astronave. Flynn dejó a ellos huir, pero ellos tenían que configurar la astronave. Por suerte, la astronave estaba configurada y Flynn salió hacia Marte. Diez minutos después, los diablos habían matado a los científicos.

LA TIERRA ROJA

A estahora, en Marte no hay edificios o instalaciones. Solo es rojo. Hay un agujero que se llama "El Pozo". Este es la fuente de la energía del infierno. Flynn debe destruirlo. El tiene que matar a todos los diablos. Flynn saltó por el pozo y vio miles de diablos. "Rasgadura y rasgadura hasta que los hecho" estaba mouerto Flynn. El hizo todo esto solo. Ahora, cuando los humanos vienen aquí, no hay diablos y ellos pueden tener toda la energía. Hay una cueva especial, en la cual Flynn ha estado esperando a los humanos para volver al futuro.

Judges' Remark:

The story is about future characters travelling into the past to stop the outbreak of Covid-19. The plot is creative and makes an interesting read.

Spanish is Siddid's second language.



CẢM ƠN CIRCUIT BREAKER

Võ Thị Trà My
5-CKS

"Số ca nhiễm hôm nay là 334...", "...447 ca hôm nay", "Số ca nhiễm ngày 18 tháng 4 tăng cao nhất từ trước đến giờ: 942 ca", và rồi ngay hai hôm sau: "1426 ca." Covid-19 giờ đây đã trở thành đại dịch toàn cầu và là một trong những điều tồi tệ nhất diễn ra trong năm 2020. Không chỉ vậy, nó còn kéo thêm những điều tồi tệ khác mà tôi chưa bao giờ nghĩ đến.

Tôi, 17 tuổi, là một cô gái hay lo nghĩ. Chẳng hiểu cái tính cách này tôi có được từ ai, nhưng tôi thật sự lo lắng rất nhiều thứ, thậm chí lo lắng quá mức. Từ những sự nhỏ nhặt, tôi vẫn có thể suy nghĩ đến những điều không hay sẽ xảy ra đến. Ví dụ như việc mỗi tay do tôi hoạt động quá nhiều thì tôi lại lo sợ rằng tôi đang gặp bệnh gì đó. Hay việc mỗi cổ vì nằm sai tư thế tôi cũng có thể liên tưởng đến những căn bệnh tương tự. Kể từ lúc nghe đến virus corona đang hoành hành tại Vũ Hán vào đầu tháng giêng, tôi đã bắt đầu hoảng sợ. Vì dịp đó cận kề Tết Nguyên Đán ở Việt Nam và tôi phải bay đi bay về giữa ba thành phố, tôi đã lo lắng rằng liệu mình có khả năng bị nhiễm không

Cách ly toàn xã hội (Circuit Breaker) và những nỗi lo chồng chất

Đầu tháng Tư, Thủ tướng Singapore, ông Lý Hiển Long cho người dân đảo quốc Sư tử biết về chính sách cách ly toàn xã hội (Circuit Breaker) đang chuẩn bị được đưa vào hoạt động. Tất cả trường học, công ty, hay những cửa tiệm bán các mặt hàng không thiết yếu đều phải đóng cửa. Tưởng chừng như làm vậy sẽ giúp hạn chế số ca nhiễm tăng lên của Singapore. Chẳng ai ngờ rằng lúc Circuit Breaker bắt đầu có hiệu lực thì số ca nhiễm Covid-19 tại Singapore còn tăng cao hơn trước. Trong khi Việt Nam, đất nước tôi đang gần công bố hết dịch, thì tại Singapore, nơi tôi đang du học, số ca nhiễm Covid-19 vẫn cứ tăng đều đặn hằng ngày.

"Minh phải về nước!". Ý nghĩ đó cứ dai dẳng trong đầu tôi, không biết tự bao giờ, làm cho tôi phải đắn đo suy nghĩ. Một bên là việc nếu được về Việt Nam thì tôi được an toàn hơn vì có gia đình ở bên (tuy vẫn phải cách ly tập trung mười bốn ngày theo lệnh của chính phủ) và cũng có thể tiếp tục học vì dù sao trường tôi cũng đang cho học sinh học qua mạng. Tuy nhiên, tôi gặp phải vấn đề lớn nhất là có khả năng tôi sẽ không qua lại được Singapore vào học kì III của trường tôi và thẻ Student Pass của tôi có thể bị hủy. Nhưng ở đây, làm sao tôi chịu được khi ngày nào cũng bị ở trong phòng 'làm bạn' với bốn bức tường và chỉ được ra ngoài hai tiếng một tuần?

Thực sự khi nghe quy định mới ở ký túc xá, tôi như muốn gào thét lên rằng: "Minh có thể chịu nổi tình trạng như giam cầm vậy sao?".

Và tôi gọi điện cho ba mẹ:

- Ba mẹ ơi! Con muốn được về Việt Nam tránh dịch.
- Nhưng không phải là hiện giờ nước mình đã tạm dừng khai thác các đường bay hai chiều giữa Singapore và Việt Nam rồi sao con? Mẹ tôi hỏi.
- Con biết vậy, nhưng con nghĩ con sẽ điên lên mất khi cứ phải ở nhà trong hai tháng nữa! Thậm chí ký túc xá của con còn giới hạn thời gian ra ngoài nữa. Với lại Singapore giờ đây con cảm thấy không còn an toàn nữa vì số ca nhiễm tăng cao quá nhanh.
- Ba mẹ hiểu rồi và ở đây ba mẹ cũng đang lo lắng cho con lắm. Nhưng con có thể về Việt Nam bằng cách nào?
- Con được biết rằng Đại sứ quán Việt Nam tại Singapore mới đưa ra đơn đăng ký nguyện vọng xin được về nước cho những công dân Việt đang sống tại Singapore. Con dự tính sẽ cùng các bạn nộp đơn.

66

Theo tôi được biết, tại thời điểm đó chỉ có Đại sứ quán mới có thể giúp tôi về nước. Được sự đồng thuận của ba mẹ, tôi và các bạn cùng điền đơn rồi chờ phản hồi. Tôi đã rất hy vọng mình có thể về nước. Mặc dù nếu được Đại sứ quán phản hồi tích cực và khi về được phải cách ly tập trung mười bốn ngày cùng với việc phải xét nghiệm Covid-19 nhưng tôi vẫn muốn về. Tôi nhận ra câu nói "Đi xa để trở về" rất đúng với hoàn cảnh hiện tại, bởi vì 'dù đi xa đến đâu thì khi gặp khó khăn, gia đình luôn là nơi ta nhớ đến đầu tiên và muốn trở về để tìm lại sự bình yên.' Ngay sau hôm nộp đơn đăng ký xong, ngày nào tôi cũng vào kiểm tra mail từ Đại sứ quán, rồi lại thất vọng khi thấy mình vẫn chưa nhận được gì cả.

Mỗi ngày sau đó, Singapore có trung bình từ 700-1000 ca nhiễm Covid-19. Việc số ca nhiễm đột ngột như vậy làm cả tôi và gia đình tôi đều lo lắng khôn nguôi. Không chỉ vậy, tôi cảm thấy khá "ngộp" trong ký túc xá. Ở Việt Nam, bạn bè tôi đang trở lại cuộc sống thường nhật - tôi hiểu là các bạn ấy cũng đã có ba tháng cách ly tại nhà, nhưng nó cũng không giống với bên đây. Ở ký túc xá, tôi bị giới hạn thời gian ra ngoài, bị ngồi tách bàn với bạn bè, cũng như việc phải học trên mạng ở nhà khiến tôi cảm thấy rất chán chường. Hơn nữa, trong những ngày đó, Singapore đang bước vào mùa mưa. Thế nên buồn càng thêm buồn, tôi cảm thấy không khí xung quanh như chùng xuống hẳn. Mỗi ngày tôi đều trông ngóng thông tin về việc về nước, và lặp đi lặp lại quy trình ngủ dậy, ăn, học, chơi rồi lại ngủ.

Một hôm, cũng như mọi ngày, tôi dành khá nhiều thời gian để lướt Facebook. Nhưng lướt nhiều quá cũng chán, tôi đang định thoát ra thì một bài đăng khiến tôi phải dừng lại đọc. "Chào mọi người! Minh là Minh và Trang đang lập một dự án để giúp đỡ những người Việt đang bị mắc kẹt tại Singapore do Covid-19..."

"Mái Ấm Việt"

Tò mò, tôi bấm vào xem thì thấy dự án có tên là 'Mái Ấm Việt' được thành lập nhằm giúp đỡ những người lao động Việt đang gặp khó khăn tại Singapore do Covid-19. Sau khi đọc xong mục đích của dự án, tôi quyết định điền đơn đăng ký làm thành viên. Tôi cũng gửi cho vài người bạn ở ký túc xá cùng đăng ký với tôi vì tôi thấy dự án này rất có ý nghĩa, và cũng vì tôi muốn có công việc để làm trong thời gian ở nhà tránh dịch này.

Ngày 20/5 là ngày họp mặt đầu tiên của dự án qua Zoom. Chúng tôi gặp nhau, chia sẻ cho nhau nghe lý do tham gia dự án cũng như để làm quen nhau trước khi bắt tay vào tổ chức dự án. Trong suốt một tháng tham gia, tôi quên hẳn mong muốn được về nước. Tôi cũng chẳng còn để tâm đến việc kiểm tra mail từ Đại sứ quán nữa. Tôi tự nói với chính mình rằng: "Ừ thì từ lúc mình nói mình muốn về Việt Nam đến nay cũng được gần hai tháng rồi đấy, nhưng mà hiện tại mình vẫn cảm thấy ổn". Có lẽ, những ước muốn đó chỉ là tức thời và nó cũng sẽ dần được trôi vào quên lãng thôi nếu mình không nhắc đến nó nữa.

“Tôi là thành viên trong ban liên lạc của dự án, với công việc lên danh sách những người lao động Việt đang gặp những khó khăn như bị chủ cắt thẻ, không được trả lương và không đủ tiền chi trả cho sinh hoạt hằng ngày. Sau đó, bọn tôi liên lạc và tìm hiểu về cuộc sống hiện tại của họ ở mùa dịch này chi tiết hơn. Tôi đã thật sự rất sốc khi nghe họ kể... Tôi được phân công liên lạc với bảy người là những lao động thuộc diện khó khăn nhất trong cộng đồng người Việt tại Singapore. Khi nhận tin hỏi chuyện họ, tôi mới nhận ra rằng vẫn còn rất nhiều người khổ hơn mình. Hầu hết mọi người đều đã đăng ký nguyện vọng xin về nước trong tờ đơn gửi Đại sứ quán và vẫn đang chờ hồi âm trong vô vọng (vì theo tôi được biết thì đã có 25,000 người đăng ký và Đại sứ quán cần sàng lọc cẩn thận để cho 350 người có những lý do chính đáng, cấp bách nhất được về nước). Tất cả những anh chị đó đều đang gặp khó khăn về tài chính vì bị chủ cắt thẻ nên họ không làm việc, và cũng không có lương.

“Vi mình viết đơn xin nghỉ việc và về nước nên chủ không trợ cấp gì cho mình cả, từ tiền ăn tiền ở cũng ko có một xu”; “Chị đã bị chủ cắt thẻ, phải ở nhà cầm cự hơn hai tháng nay”; hay “Mẹ của mình đang bệnh nặng nên mình rất mong được về nước, và vì đã viết đơn xin nghỉ việc nên hiện tại nguồn tài chính của mình hiện không đủ để cầm cự”. Những câu nói đó khiến lòng tôi đau nhói.

Tuy nhiên, trong số đó có một chị còn khó khăn hơn cả: chị đang mang bầu bảy tháng. Không những vậy, chị còn bị đau bụng rất thường xuyên, đến nỗi chị vừa phải khám thai vừa khám sức khỏe tổng quát. Chị và chồng chị đều bị chủ cho nghỉ việc, riêng chị thì đã bị cắt thẻ từ hai tháng nay, vì thế nên hai vợ chồng không có thu nhập. Tiền bệnh viện lên tới hàng trăm đô la Singapore, tiền hai vợ chồng làm lụng mấy tháng qua rồi cất giữ giờ cũng không cánh mà bay. Vì thương chị hơn cả nên tôi cũng hay thường xuyên liên lạc để hỏi han tình hình chị trong thời gian diễn ra dự án.

- Em chào chị, hiện tại chị đã đỡ đau bụng hơn chưa ạ?

- Cũng khỏe hơn rồi em ơi. – Giọng chị nghe buồn buồn.

- Bữa trước em có nghe chị nói là hôm nay chị đi siêu âm thai, em bé chắc vẫn mạnh khỏe đúng không ạ? Tôi cố để làm cuộc trò chuyện vui vẻ hơn.



“
”
- Hôm nay.. chị không đi em ạ. Giờ tiền cho vợ chồng chị ăn uống còn không đủ thì lấy đâu ra tiền để đi khám hả em?

Tôi nghẹn lời. Sự im lặng chùng xuống. Tôi không biết nên nói gì nữa cả. Chị tiếp lời:

- Chị khổ lắm em ơi, giờ hai vợ chồng chị không còn tiền nữa. Đại sứ quán thì vẫn chưa thấy hồi âm. Cơ thể chị có mệt mỏi, muốn kiểm tra sức khỏe cũng không có tiền để chi trả. Hên là có mấy người hàng xóm thương chị mà cho chị mấy bịch mì gói, giờ vợ chồng chị ăn mì gói qua ngày thôi. Cuộc sống nơi xa xứ khó khăn, vất vả, khổ sở như thế này không biết phải làm sao...

Chị nói như muốn khóc, làm tôi cũng ráng kim lòng mình lại để nước mắt không tuôn tràn. Đã xác định sẽ chuyện trò cùng chị để chị vơi bớt nỗi buồn, mà tôi còn khóc nữa thì phải làm sao đây? Hít thở thật sâu, tôi cố nói những lời an ủi trước khi cúp máy:

- Dạ chị đừng lo lắng nhiều nữa ạ. Tụi em sẽ cố hết sức để kêu gọi quyên góp đạt được mục tiêu rồi tụi em sẽ dùng số tiền đó để giúp đỡ cho hai anh chị. Mặc dù có thể “của thì ít”, nhưng tụi em hi vọng “tấm lòng thì nhiều”, và dự án sẽ mang đến cho những người lao động Việt đang gặp khó khăn ở đây một chỗ dựa tinh thần và một niềm hạnh phúc nho nhỏ trong giai đoạn khắc nghiệt này ạ.

“
”
Nói rồi, hai chị em tạm biệt nhau. Lòng tôi cứ bứt rứt, trách sao lâu nay tôi vô tâm thế, tôi ích kỷ thế. Cuộc sống này luôn có hai mặt, mà đúng là có những điều nếu mình không khám phá ra thì chắc đến lâu sau này mình cũng không biết được. Nhưng tôi cũng hiểu thêm được rằng, trong tình cảnh khó khăn như thế này, tinh thần “lá lành đùm lá rách” của người dân Việt ta sao mà to lớn quá. Dù trong hoàn cảnh vẫn cố gắng giúp đỡ nhau là lí do mà tôi rất yêu con người Việt Nam và cảm thấy may mắn khi là người Việt Nam.

Sự may mắn – hiện hữu nhưng cũng vô hình

Sự may mắn – một trong những thứ mà ít ai trân trọng, cho đến khi nó biến mất. Tôi cũng vậy. Tôi nhận ra mình vẫn còn quá may mắn, vì không biết rằng mình may mắn đến nhường nào, tôi đã trở nên ích kỷ. Bản thân tôi là một du học sinh được ba mẹ trợ cấp đầy đủ học phí, chỗ ăn chỗ ở, và còn tiền sinh hoạt, thế mà tôi lại kêu ca đòi về nước cho bằng được khi dịch ở Singapore bùng phát. Tôi chỉ nghĩ đến bản thân mình muốn được về nước càng sớm càng tốt, và thậm chí còn cố gắng nhờ sự giúp đỡ của những người có quan hệ với Đại sứ quán để nói

66

99

chuyện xin về, mà chưa hề nghĩ đến việc có những người còn đang gặp khó khăn hơn mình ngoài kia cũng có chung mong muốn. Thậm chí, ký túc xá của tôi còn cung cấp đều đặn mỗi ngày ba bữa ăn và kiểm tra nhiệt độ cơ thể của tôi hằng ngày. Tôi vì không nhận ra những đặc quyền mình đang có, mà cảm thấy buồn chán và còn nghĩ ngợi những điều tiêu cực. Trong khi tôi vẫn được ngủ trong chăn êm nệm ấm với đầy đủ tiện nghi, thì những người lao động Việt ngoài kia đang phải chật vật để trang trải tiền sinh hoạt cũng như phải chịu nhiều bất tiện khác. Nghĩ đến đó làm tôi nhói đau, và tôi quyết tâm cố gắng hết mức để có thể giúp đỡ họ. Sau hai tuần kêu gọi quyên góp thì chúng tôi cũng đã đạt được chỉ tiêu đã đề ra là 5,037 SGD. Một con số không quá lớn, nhưng cũng không hề nhỏ, đã góp phần giúp đỡ cho gần 50 người đang gặp khó khăn trong dịch Covid-19 tại Singapore. Tuy ban đầu thành lập dự án thì cũng có nhiều người không tin và sợ đây là lừa đảo, chúng tôi vẫn luôn giữ vững tin thần và luôn nhắc nhở nhau rằng "Cho đi hạnh phúc nhiều hơn nhận lại. Vì thế đừng vì một số người mà làm lung lay một dự án". Tôi nhận ra rằng cảm xúc của mình đều là do mình tự tạo nên, vậy nên tại sao tôi lại không tạo cho mình niềm hạnh phúc này sớm hơn nhỉ?

Số tiền mà dự án Mái Ấm Việt kiếm được để hỗ trợ cho mọi người tuy không nhiều, nhưng cũng đủ giúp họ sống tốt hơn cho những tháng sắp tới, trong khi chờ tin báo từ Đại sứ quán. Tôi thực sự cảm thấy hạnh phúc và yêu đời hơn. Chính dự án đã dạy cho tôi rất nhiều thứ, và giúp tôi hiểu được rằng: "À, thì ra việc ở nhà cũng không chán đến vậy". Ở nhà chưa chắc là vô dụng, chưa chắc là không làm được gì có ích, vì tôi mới vừa thực hiện được một điều rất có ích đấy thôi! Những suy nghĩ tiêu cực xung quanh tôi ở đầu giai đoạn Circuit Breaker giờ đây đã tan biến, và thay vào đó là sự bình an. Tôi nhận ra mình cần phải biết trân trọng những đặc quyền, những điều may mắn mà mình đang nhận được so với những người khó khăn hơn. Dự án kết thúc vào cuối tháng Sáu, cũng là lúc tôi sắp quay lại trường học. Tôi cảm ơn Circuit Breaker đã tạo cho tôi khoảng thời gian quý báu, giúp cho tôi chiêm nghiệm được những giá trị của cuộc sống hơn.

Judges' Remark:

The story is about a student who participates in a community project during the Circuit Breaker and how she grows through the experience. It is a touching and heartbreaking story with a happy ending.

Vietnamese language is Trà My's first language.



This ebook is made possible by the kind sponsorship from the Parent School Partners, teachers from the Languages Faculty of ACS International, and all the students who have taken part in the Competition. Special thanks to Low Kah Wei, Joanne Cardoza, Benjamaporn Ruechai, Noey Thaipetkul, Thanakhom Hoontrakul and Thanaporn Prayoonrat (Niece).